

第57集

研究紀要



三好教育研究所
平成28年度

ご あ い さ つ

やわらかな陽射しが日一日と暖かさを加えるこの頃です。会員の先生方には年度末のまとめの時期を迎え、お忙しい日々をお過ごしのことと拝察いたします。日頃は三好教育会振興のために、温かいご理解とご支援をいただいておりますことに心から感謝申し上げます。

本教育会と三好教育研究所では、平成24年度から研究主題を「未来を切り拓き、心豊かにたくましく生きる子どもの育成」とし、三好地域の子どもたちが、ふるさとの自然や人とのふれあいを大切にしながら、自分たちの未来を切り拓き、たくましく生きる力を育成することをめざし研究を重ねてきました。研究主題は5年周期で改題するということから、27・28年度2ヶ年の取り組みが最終となります。山城小学校と本研究所研究員に研究実践とその成果を平成28年8月18日の「三好教育研究発表会」でご発表いただきました。

○ 地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成

～様々な人との関わりや体験活動を通して～ 山城小学校（発表 教諭 井上 清隆氏）

山城小学校の取り組みについては、66名の児童は、素直で礼儀正しく、学習への取り組みもまじめであるが、主体的に課題に取り組み、自らの考えを深め広げようとするような学習を苦手とする児童が多い上に、過疎化や少子化、小学校の統廃合が進む中、通学区域の拡大などに伴って、子どもたちの社会的体験や遊び体験が少なくなっている現状を踏まえ、地域のさまざまな「ひと・もの・こと」との体験的な関わりを重視した学習を進めてきているという発表であった。

○ 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題 三好教育研究所研究員 加藤 公夫氏

研究所の取り組みについては、研究員の籍置校辻小学校において取り組まれてきた「知る、楽しむ、育む」ことのできる土曜授業の実践に参加し、研究を進めていた。辻小学校では、土曜授業日を基礎学力の定着と学力調査の結果から見えてきた課題克服をめざす時間と位置づけ、既存の行事を見直し、保護者や地域の方々が参画しやすい内容や時期を検討し、今まで以上に学校・家庭・地域の連携を推進することができ、学校を中心として、地域の活性化にもつながったという発表であった。また、全国的な土曜授業の実施状況や三好市内各校の実践についても紹介があった。

発表会の後には、東京学芸大学教授 大石 学氏に「江戸の教育力」と題してご講演をいただきました。大石氏は「歴史の虚構と真実」「江戸時代の行政改革」等をテーマにして、江戸幕府八代将軍徳川吉宗の政治を中心に日本近世史を研究されています。学術研究・教育の傍ら、NHK大河ドラマ「新撰組」「篤姫」「龍馬伝」「八重の桜」を始め、テレビ、映画、マンガ、小説等歴史作品の時代考証を担当し、古い形の時代考証を脱却し、制作者とともに作り上げる新しい時代考証をめざしている方で、わかりやすくていへん有意義な講演でした。

この研究紀要は各学校1部ずつCD化して配布させていただくとともに三好教育研究所ホームページにも掲載をしています。ご活用いただければ幸いです。

終わりにになりましたが、本研究紀要発行にあたりご指導・ご助言いただいた先生方、研究協力校（園）および関係各位に心よりお礼申し上げますとともに、会員の先生方のますますのご活躍をお祈りします。

平成29年3月

三好教育会長 高岡 直史

目 次

あいさつ

三好教育会 会長 高岡 直史

———— 研究指定校研究 ————

- 地域から学び，郷土を愛し，主体的にたくましく生きる児童の育成……………1
～様々な人とのかかわりや体験活動を通して～

山城小学校 （ 発表者 教諭 井上清隆 ）

- 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題……………12

三好教育研究所 研究員 加藤 公夫

———— 教育研究所研究員研究 ————

- 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育……………23
～見て，考えて，表して，意見を交わす～

三好教育研究所 研究員 宮成 万寿美

- 既刊『研究紀要』の内容一覧（平成元年～）……………55

研究主題

「地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成」
～様々な人とののかかわりや体験活動を通して～

山城小学校 （ 発表者 教諭 井上清隆 ）

1 はじめに

学校・校区の様子

本校のある山城町は三好市西部、吉野川の中流域に位置している。人口は約3,900人。平坦な個所が少ない山間へき地である。

国の天然記念物、名勝にも指定された大歩危峡をはじめ自然に恵まれており、境港市・遠野市と並んで、「世界妖怪協会」認定の「怪遺産」に選ばれるなど、豊かな文化や人材を有している。最近では、ラフティングの町としても知られるようになった。

山城町は小学校の休校が相次いでいる。町内に9校あった小学校も、この10年間で3校にまで減少しており、本年度末には政友小学校も休校の予定である。

本校は全校児童66名の小規模校である。校区はたいへん広く、児童は、町内のほぼ全域から通学しており、通学方法も多様である。

保護者や地域の方々は学校教育活動に協力的である。児童は素直で礼儀正しく、学習への取り組みもまじめであるが、主体的に課題に取り組み、自らの考えを深め広げようとするような学習を苦手とする児童も多い。

また、過疎化や少子化、小学校の統廃合が進む中、通学区域の拡大などにもなっており、子どもたちの社会的経験や遊び体験も少なくなっている。

こうした現状をふまえ、本校では昨年度より研究主題を「地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成」とし、地域のさまざまな「ひと・もの・こと」との体験的なかかわりを重視した学習を推し進めてきた。

これらの活動を通して、自分達が住む地域や社会への関心を高め、社会とののかかわり方や豊かな人間関係構築の意欲とスキルを育てるとともに、社会の変化に柔軟に対応できる心と体、知恵をもった児童を育成していきたいと考えている。



（ラフティング）



（校舎遠景）

2 研究のねらい

（1）なぜ人とののかかわりや体験活動を通してか？

①近年の子どもをめぐる課題

子どもを取り巻く環境は、ますます個（孤）立化している。数人集まっても、黙々とゲームに夢中になり会話すらない。これが現代を代表する子どもの姿であろう。しかも、バーチャルの世界では何でも可能であり、殺されても何回でも生き返れる。そんなバーチャル化の中で、「人間関係をうまく作れない、集団生活に適応できない」子どもが増加し、規範意識

の低下、物事に根気強く創意をもって取り組む意欲の欠如など、様々な教育課題が問題になっている。本校でも、少なからず同様の影響が見られる。それらの問題の背景として、例えば次のような状況が挙げられるのではないかとされている。

②自然や地域社会と深く関わる機会の減少

インターネットやマルチメディアの時代にあつては、自然や地域社会とかかわって遊ぶことや体験的な活動が不足しがちである。また情報を得ることが非常に容易になるにともなうて、子どもが膨大な量の情報にさらされており、それらを取捨選択し、整理する能力も求められる。様々な人とかかわり体験することは、「見る（視覚）」「聞く（聴覚）」「味わう（味覚）」「嗅ぐ（嗅覚）」「触れる（触覚）」を働かせ、物事を多様な視点からとらえる力をつけることにつながると考えられる。

③集団活動の不足

学校教育活動は集団での活動を基本として行われる。学校外での活動とあいまって、集団内の様々な人間関係や集団で行動することで得られる成就感・達成感等を通じて、自らを律する精神や集団活動の意義を学び、社会性を身に付けていく。しかしこうした体験をする機会は、児童生徒をとりまく環境の変化に伴い、減少している。このため、集団行動を苦手としたり内に閉じこもる子どもや、集団の一員としての自覚や責任を十分認識できず、社会性ある適切な行動を選択できない子どもの増加につながっていると考えられる。

④地域や家庭の教育力の低下

核家族化や共働き世帯の増加などの社会環境の変化に伴い、地域コミュニティが衰退するとともに、家庭の教育力の低下が指摘されている。本来は地域や家庭において育まれるべきさまざまなしつけや基本的な倫理観・社会性の育成などが十分なされていない。

（２）体験活動のねらい

体験活動を充実させるためには、その意義を理解することが重要となる。

体験活動は、子どもの「学び」の過程が、「感覚（体験）→思考（概念化）→実践（自己実現）」という方向でまとめることができる。子どもたちは、具体的な体験や事物とのかかわりを通して、感動したり、驚いたりしながら「なぜ、どうして」という考えを深める中で、実際の生活や社会、自然の在り方を学んでいく。体験は「学び」の出発点であり、五感を通した体験的な活動は、子どもたちの思考を活性化させるとともに、学ぶことの喜びや意欲を生み出していく。

また、豊かな人間性や社会性を育む過程においても、広く直接体験を重ねることが極めて重要になる。子どもたちは、現実の世界や生活に向き合い、自然や社会、人々とかかわり、感動したり、困難に直面し葛藤したり、解決の方法を模索したりするなど、さまざまな場面に出会いながら人や社会とよりよくかかわる力を高め、人間性を豊かにしていくのである。

学校教育において的確なねらいをもち、まとまりのある体験活動を実施することの意義について「体験活動事例集－豊かな体験活動の推進のために－」（文部科学省H14.3）では、

次のようなものが挙げられている。

- ① 現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上
- ② 問題発見や問題解決能力の育成
- ③ 思考や理解の基盤づくり
- ④ 教科等の「知」の総合化と実践化
- ⑤ 自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得
- ⑥ 社会性や共に生きる力の育成
- ⑦ 豊かな人間性や価値観の形成
- ⑧ 基礎的な体力や心身の健康の保持増進

体験は「心と体」をはぐくむと言われる。体験活動を通して、心と体をはぐくみ、生きる知恵を身に付け、将来、社会人としてたくましく生き抜く力を育成したいと取り組んだ。

3 実践の紹介

(1) 長命会や青年団とのかかわり

①防災授業

山城地域は地滑りによる山崩れの多い地域であり、本校も地滑り地域の真ん中に位置している。そのため、学校の真裏には大規模な砂防ダムが建設されている。小石がたくさん落ちているなど、山肌が普段と違う兆候を見せたときには、素早く避難する必要がある。こうした危機意識をもたせるためにも、雨の多い6月に防災授業を行うことに意義があると考えた。

昨年度より土曜授業が始まったのを契機に、6月の土曜授業では防災参観、土砂災害による避難訓練と引渡訓練を実施することにした。防災関連の授業参観の後、昨年度は救急救命法を児童・保護者を対象に行い、本年度は災害時避難シミュレーションを実施した。



防災教育授業参観



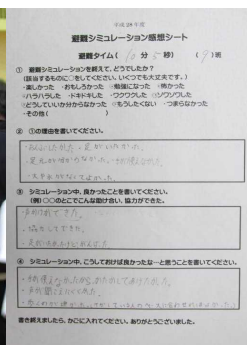
心肺蘇生法



避難シミュレーション



引渡訓練



児童の感想

②段ボールハウスで防災キャンプ

学校だけの取り組みで終わらず、8月には山城分館や青年団と協力して、「段ボールハウスで防災キャンプ」を実施した。キャンプは、地域防災について考えたり、友達や地域の人と協力する意識を高めることなどを目的に行った。

本校児童だけでなく町内の小学校に通う児童も参加し、30人の児童と、保護者や地域の人も含め、総勢50人での実施となった。

児童は4班に分かれ、どんな段ボールハウスを作るのか話し合った後、作業に取り掛かった。

軽トラック5台分の段ボールの中から使いたいものを選び、設計図を見ながら段ボールを切ったり張り合わせたりした。児童は黙々と作業を進め、大人はそれをサポートしていく。

1班は屋根付きハウス。段ボールで壁を作り、支えとなる柱を取り付け、部屋を二つに分けたら、みんなで屋根を取りつける。最後に窓を作り完成させた。

2班は遊牧民が使っているパオのようなテント。中央に屋根を支える柱を立て、円形状の段ボールハウスを完成させた。

作業開始からおよそ2時間後、個性豊かな4つの段ボールハウスを完成させた。この日、児童は自分たちで作った段ボールハウスで一夜を過ごし、地域の一員として防災について考えることができた。本年度は7月に開催された。



作業の様子



1班の段ボールハウス



軽トラック5台分の段ボール



炊き出し体験



2班の段ボールハウス

③手紙の書き方出前教室（地域のお年寄りとの関わり）

本校校区の高齢者の会である長命会へ毎年暑中見舞いはがきと年賀状を本校児童が作成して届けている。

また、便りを楽しみにしてくださっている長命会から、たくさんのお礼の手紙も届く。

昨年度は、7月に「手紙の書き方出前授業」を行い、郵便の届くまでや、はがきの書き方などを教えていた



だいた。

本年度も7月に、日本郵便四国支社の方を講師に、暑中見舞いはがきを作成した。手紙を書く機会自体が少なくなっている今、正しく美しいはがきの書き方を学ぶよい機会となっている。

高学年は徳島新聞N I E推進室の方にも参加していただいて、相手を気遣う内容を考えながら、はがきを仕上げた。また、本校は9月に運動会があるため、暑中見舞いはがきで運動会への参加も呼びかけている。

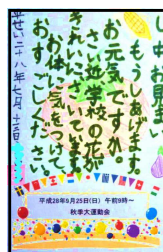
運動会には都合で参加できない方もいる。そこで、9月にある校区敬老会に6年生が代表で参加して、運動会で行うダンス（表現）を披露している。

長命会の方も、運動会前に本校に来校してくださり、樹木の選定作業や草取りなどをしてきている。運動会では子どもたちの競技に声援を送ってくれたり1・2年生との玉入れなどの競技に参加してくださる。

年末には、夏の手紙の書き方出前授業で学んだことを生かして年賀状を作成し、新年、長寿のあいさつとしている。これは、2月に予定している学習発表会の招待状も兼ねている。



敬老会の様子



長命会の方へ書いた暑中見舞いはがき

(2) 地域の伝統文化とのかかわり

日本の伝統や文化を理解し大切にする教育は、従来、日常生活の具体的な時と場に即して行われてきた。しかし、時代の変化とともに、家庭や地域社会において子どもたちが伝統や文化について理解したり経験したりする機会が減ってきている。

子どもたちが日本の伝統や文化の価値を学ぶためには、学校が家庭、地域社会と連携を図りながら、計画的・系統的な指導を展開することが必要である。また、郷土や自国の文化理解を基盤とし、さまざまな価値観や、異文化を理解し、大切にしようとする心も育まれていくと考えられる。

①山城町大川持の獅子太鼓

校区内の石立神社と寄木神社に、神事後、獅子太鼓が奉納される。子どもたちの力強い太鼓に合わせ、獅子が迫力ある舞いを奉納し、五穀豊穡などを祈願する。

獅子舞は大人が演じ、子どもが太鼓を打つ。大川持地区の子どもだけでなく、それ以外の地区からも参加児童が増え、



広がりを見せている。

地域の方の願いを学ぼうと、それぞれの地区でなぜ祭りが継承されてるのか、世話役の方に獅子太鼓の由来や地域の歴史を聞く機会を設けた。代表の方は受け継がれてきた伝統を絶やさずに伝えていきたいと話された。



感想



獅子太鼓

子どもたちにも地域の大人たちの思いが伝わったようである。

②狸祭り

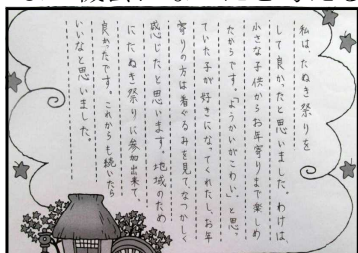
近年、山城町は妖怪の里としても有名である。11月には町内で妖怪祭りも開催されている。その妖怪の中でも数多くを占めるのが狸である。

昨年、土讃線の開通80周年にあわせて、校区内にある阿波川口駅を中心にした、「山城狸まつり」が企画され、本校児童も子狸に扮装してイベントに参加することになった。

まず、児童にとってほとんどなじみのなくなった、地域に伝わる狸伝説を知ることから始めた。幸い本町には、地域の昔話を語り継ぐ活動をしている方がおり、それら有志の方々の手作りによる、町に伝わる狸伝説3話を題材にした紙芝居を教材に学習することとした。古くから言い伝えられてきた、妖怪伝説や狸にまつわる話を、後生にも語り継ごうと活動している方々の、ふるさとへの思いや、子どもたちへの期待も語っていただいた。

続いて、子狸が持つ提灯づくりワークショップを行い、三好市の地域おこし協力隊の方や、妖怪伝説を題材にしたアートイベントを手がける芸術家の方々の協力のもと、和紙や針金を貼り合わせて、提灯や子狸の小道具を製作した。

イベント当日は、浴衣を着て、狸にふんした児童たちが町なかを練り歩いた。自作の狸の耳当て、提灯をぶら下げて楽しそうに歩いていく。普段の日曜日はシャッター通りとなる商店街が、この日は朝から大勢の人で活気づいていた。子どもたちにも自然と笑顔があふれ、地元さらに愛着を感じるよい機会になったと考える。



③「妖怪の町のなぞをさぐれ！」

5年生では総合的な学習の時間のテーマを「山城町がなぜ『妖怪の町』になったのか。」とした。活動を通して子どもたちは、地域の方のふるさとへの愛情や自分たちへの思いに気がついた。そして地元をもっと盛り上げたいと考え、「妖怪カレンダープロジェクト」を実行した。

調べたことを劇にまとめて発表したり、妖怪カレンダーを作成・配付したりするなかで、ふるさとへの思いを深めたり自分にできることは何か考えたりした。



(3) 山城分館とのかかわり

・三世代交流学習

山城分館を中心に地域の方をゲストティーチャーとして招いて、三世代の交流学習を毎年12月に実施している。生活科や総合的な学習の時間の学びの中で交流を図っている。

【1年・2年 昔の遊び】

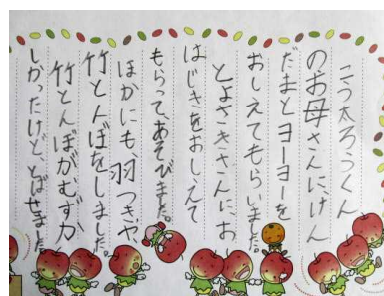
○生活科の学習



竹とんぼ



おはじき



児童の感想

【3年 昔の道具を使った食事】

○社会科の時間で学んだ昔の道具を使つての食事作り。



かまどでご飯炊き



七輪でうるめ焼き

【4年 ひょうたん飾り】

○理科の時間に育てたひょうたんを使っての飾りづくり。



ニス塗り



飾り紐付け



感想

【5年 焼き板工作】

○図画工作科 町内産の杉板を使っての焼き板工作・伝言板づくり。



焼き目入れ



端を好きな形にカット



ニス塗り

【6年 戦時中の生活】

○社会科の歴史学習で戦時中の体験談を聞く。



語り手



食用とした野草



監視哨を伝える新聞記事

（4）地域の産業を通したキャリア教育

山城町にはその地形や季候を生かした様々な特産物がある。その特産物づくりに取り組んでいる人々の思いや願いについて学習を進めた。また、三好市で働くことの魅力を出前授業で学んだ。

①製茶

4年生の総合的な学習の時間のテーマは「山城のすてきをさぐろう」である。山城町の自然を生かした特産品づくりに取り組んでいる方々に焦点をあてて学習に取り組んだ。

徳島県内有数の茶産地である本町には、茶畑が山間傾斜地に点在している。頼広地区で製茶工場を営む農家をたずね、製茶の秘密を探ろうと学習を進めた。



② 鮎料理

次は鮎料理である。校区内を流れる吉野川は急流や瀬が多く、鮎釣りの好ポイントがたくさんある。その中でも釣り場として有名なのが「鮎戸の瀬」。そこで鮎料理店を営まれている方を訪ねてお話をうかがった。



③ 菌床しいたけ栽培

水量豊かできれいな水に恵まれた平野地区では、農家が協同して菌床しいたけ栽培を行っている。給食にもよく出てくるしいたけ栽培の工夫に迫ってみた。



④ ハレとケデザイン舎 ～「夢」について～

他県から移住し三好市でカフェを営んでいる方から、「夢」というテーマでお話を伺った。「三好市の自然を素晴らしいと感じて、お店を開いた。」という言葉に子どもたちは改めてふるさとの魅力に気づいた。また、夢を叶えた経緯や苦労、努力などについて具体的な話を聞くことができ、子どもたちにとって貴重な経験となった。



（５）新たななかかわり

・ICT実証事業

小規模校における課題の一つとして「授業で多様な意見を聞いたり、多様な活動を行うことがくことが難しい。」という点が挙げられる。そこで平成 27 年度より山城町内 3 校の 5・6 年生を対象に、ICT を用いて合同授業を行っている。タブレットなどを用いたグループ活動を通して、実際に会話をしたり意見交換したりしている。授業後、子どもたちは「普段よりいろいろな意見が聞けて、考えが深められた。」「緊張したが他校の友達に自分の意見が言えてよかった。」と話していた。



参考：「人口減少社会における ICT の活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」

過疎化や少子高齢化が進む人口減少地域において、ICT の活用により、遠隔地間の児童生徒の学びの充実など、教育の質の維持向上を図るための実証検証。

4 成果と課題

イベント型の単発的な学習では、子どもたちの理解を定着・発展させることは困難である。これまでも伝統・文化にかかわる活動を行ってきたが、学校としてより計画的・系統的に実施するよう教育課程上の工夫・改善を行った。

例えば、防災キャンプでは、集団で協力しながら活動を進めていく（生活・総合）、様々や用具を利用してハウスを作る（図工科）、食事作り（家庭科）、振り返りをまとめる（国語科）などの複数の教科にまたがるものにしている。



（学習発表会の様子）

また、狸まつりでは、お話の聞き取り、衣装製作、まつり参加、学習発表会での発表と長期間にわたる学習活動とした。

体験活動や出前授業が終わった際には、まとめ・振り返りの活動を行うようにし、多くの場合でお礼の手紙や感想をまとめて相手に気持ちを伝えるようにもしてきた。

（１）成果

- 体験活動をたくさん積むことで、「わからないことは、そのままにしないで調べる」、「誰とでも協力してグループ活動を行う」、「相手の立場になって考えることができる」子どもが増えてきている。
- 多様な体験的活動を通して、知識の習得→活動という学習サイクルが確立されつつある。こうした学習を経て、課題への理解が一層促されるとともに、学習への自発的な取り組みを一層はかっていきたい。

- 上手くいくことばかりでなく、失敗や苦勞をすることで成長することができた。
- 自分が住んでいる地域を見つめ直すことで、身近に誇れるものが多く存在することに気づき、その良さを再発見することができた。
- やりがいをもって地域に根ざした仕事をしている大人たちが自らの経験を示したり語りかけたりすることを通じて、子どもたちが現在の自分自身を見直し、自分の生き方や将来について考えるきっかけとなった。
- 地域が有する歴史・文化・自然・人材等と学校とのネットワークが広がった。
- 地域の人々にとっても、これまで培ってきた知識や経験を伝えることによって、自分達がかかわる地域産業や、地域に根ざした文化の重要性を再認識することができた。
- 体験活動の成果を家庭において共有すること等により、学校の教育活動に対する理解が深まるとともに、家庭におけるコミュニケーションも深まった。

(2) 課題

- 休校となった学校から児童が通うようになった際、それぞれの学校で取り組んできた活動が十分引き継がれてきていないところがある。
- 中学校と学習内容が重複しているところもあり、小中の9年間を見越したキャリア教育のカリキュラムを構築していく必要がある。
- 校区が広がったことで、地域との関係づくりの再構築も必要である。活動の質を高めるために、これまで以上のネットワークづくりを行う必要がある。
- 学校の教育活動に地域の教育力を生かすため、保護者、地域人材や団体、企業等が学校をサポートしてくれる、また、それを結び付けてくれるコーディネーターとの連携がますます重要になってくる。
- 学校としてより計画的・系統的に実施するよう今後とも教育課程上の工夫・改善をしていく必要がある。
- より効果のある活動を行うために、学校も日頃からネットワークづくりを広げて、事前研修はもとより、実際の活動を通して、活動の質を高める体制を整える。
- 自校で行える体験活動を収集、分類、整理するとともに、地域の人材や教育資源の掘り起こしが必要である。
- 学習課題が児童にとって切実性があるかどうかにより、学習への興味関心に差があらわれやすい。
- 支援学級在籍児は、健常児とは活動のペースが異なることもあり、どのような取組みが意欲の向上につながるか、工夫していく必要がある。

5 おわりに

体験活動は、「生きる力」を育む有効なツールと考えられている。しかし、ただ体験させるだけでは十分な教育的効果は期待できない。体験させたことをふり返らせ、自己内省させて初めて「生きる力」へと昇華していく。そのためには、詳細のプランづくりが重要であり、教育課程の不断の見直しと整理が必要である。

今後とも、子どもたちに未来を生き抜く力をはぐくむために、「地域と共にある学校、社会に開かれた教育課程」を目指したい。

「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題

三好教育研究所 研究員 加藤公夫

1 はじめに

公立の小中学校において、本来は休日の土曜日に授業をする動きが増えてきている。「ゆとり教育」からの転換や教える内容を増やした新学習指導要領の実施に伴い、授業時間の確保などが狙いとみられる。文部科学省も『土曜授業』普及のために省令を改正し、市町村教委の判断で実施できるようになった。三好市においても、子どもたちの確かな学力、豊かな心、健やかな体などの「生きる力」を育み、その成長を支えることを目指して27年度から年6回の「土曜授業」を開始している。

このような全国的な新しい動き、また本市での実践について、調査研究をしたいと考えた。

2 研究の目的と方法

本研究を始めるにあたり、全国的な新しい動きについての状況調査結果や市内各小中学校の土曜授業の実践について研究報告することが、今後の取り組みに少しでも参考になるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

そこで、まず各学校現場の実践状況を具体的に調査、その成果と課題を明らかにすることとした。また、三好市立辻小学校における土曜授業の活動や行事にともに参加させていただくことで、土曜授業の実践にかかる計画や準備、実際の活動状況、児童の様子などに直接触れるとともに、その成果と課題について考察する機会を得ることができた。市内各小中学校の先生方には、お忙しい中多大なるご協力をいただき深く感謝しているところである。

3 全国の状況、三好市の状況について

(1) 東京都および全国の状況

東京都教育委員会は2010（平成22）年1月、学校と地域の連携など「開かれた学校づくり」を目的に、保護者や地域住民に授業公開するなどの条件付きで、「月2回」まで、土曜日授業の実施を認める方針を打ち出し、各区市町村教育委員会教育長、都立学校長に宛てて通知をだした。この通知をきっかけに、即時年間20日をおろしてきた地教委もあれば、土曜授業はほとんど行わない地教委もあり、地教委ごとの対応が異なっていた。

2011（平成23）年度の土曜日授業についての調査によると都内の公立学校（小1308校中622校）の小学校の32.6%、中学校の31.7%の学校が、月1回以上の土曜日授業を実施している。これは、前年度に比べ小中ともに3倍以上に拡大している。

（東京都教育委員会教育庁報N0,564,N0,577より）

一方、文部科学省が平成26年7月に公表した「公立小・中・高等学校における土曜日の教育活動実施予定状況調査」の結果によると、全国における土曜授業の実施率は、小学校17.1%、中学校18.3%。今年の3月の調査結果によると平成27年度、小学校において土曜授業を実施しているとした学校の割合は24.6%。中学校においては25.0%となり、実施校はゆっくりとした拡大を見せている。（文部科学省、報道発表26年7月25日・28年3月7日より）

(2) 三好市の状況

三好市の土曜授業再開については、アンケート調査や様々な研修、協議を重ね、平成27年度4月より再開することになった。

『・・・子どもたちにこれまで以上に豊かな教育環境を提供しながら、その成長を支えることを目指して、学校・家庭・地域が連携し、授業や地域における多様な学習、文化やスポーツ、体験活動などの機会の充実に取り組むことが重要と考えられています。』

そこで、三好市教育委員会では、子どもたちの「生きる力」の育成に資する観点に立ち、市内全小中学校を対象に、平成27年4月より「土曜授業」を開始します。・・・』(市報みよし第104号)

4 研究の実際

(1) 辻小学校の取り組みに参加して

私の籍置き校である辻小学校は、学校環境や地域等もよく分かり、児童とも顔なじみであることから、土曜授業の実践に参加させていただき、土曜授業の研究をさせていただくことができた。

辻小学校では、土曜授業を基礎学力の定着と学力調査等の結果から見えてきた課題克服をめざす時間と位置づけている。また既存の行事の見直しを行い、保護者や地域の方々の参画を得やすい内容や時期を検討し、年間の教育課程を見通した土曜授業日における活動を計画しました。保護者や地域を巻き込んで「知る、楽しむ、育む」の経験を積み重ね、今まで以上に学校・家庭・地域の連携を推進することで、学校を中心として地域の活性化にもつながると考え、土曜授業に取り組んでいる。

27(28)年度の授業内容			赤字は例年の行事	緑字は新規の行事
5月	①②交通安全教室 ③学活 交通読本			全校行事、学活
6月	①②外部講師による講演会 ③心肺蘇生法講習会			総合学習(3~5年) 行事(4~6年)
10月	(オープンスクール) ①②教科学習 ③総合(携帯安全教室)			総合学習(3~6年)
11月	①②教科学習 ③ふかしいも試食会(焼き芋)			行事(全学年)
12月	①②③ ふるさと探訪			総合学習(全学年)
2月	①②③教科学習			
H28 6月	防災学習			

昨年度の取り組みのなかで、土曜日の活動として新しく入った内容としては、6月の講演会と12

月のふるさと探訪である。5月、6月、10月、11月は例年の行事を土曜日に取り入れたものである。しかしながら、土曜日に行くことで保護者や地域の人々の参加も増えている。児童たちも、すべての授業〈行事〉に興味をもって参加していた。外部からの講師や体験学習などのを活用することで学習への興味関心を引き出し、積極的な取り組みができた。また、地域の人との交流のなかで地域会の一員としての自覚の意識づけとコミュニケーション能力の育成に役立つことができた。

○ 交通安全教室

5月9日（土）交通安全教室を実施した。交通安全協会の武田さんや交通安全協会の指導員さんなどに協力してもらい活動を行った。自己紹介の後、武田さんのお話や腹話術などを行い、交通事故に遭わないための大切なポイントなどを教わった。体育館での指導の後国道192号線沿いの通学路にある横断歩道での実践活動を行った。

体育館で指導されたことを守り、しっかりと活動が出来ていた。毎年の交通安全教室ではあるが、教える方も工夫をこらしてくれているので、子どもたちも緊張感をもって取り組んでいた。童の新たな読書意欲につながるのではないかと考える。本を通して、それまでとは違ったことに興味をわくこともあるだろう。



○ 講演会「住んでみたアフリカ」

6月6日は、元外交官の西村二郎さんの講演会を行った。（3～6年）



講演会には、児童、保護者、地域の人も参加して西村さんのお話を聞いた。子どもたちも、行ったことのないアフリカのことについて真剣になって聞いていた。最初にアフリカの位置や気候の様子など地図やグラフを使って丁寧に説明してくれ、西村さんが住んでいたジンバブエの遺跡や観光したら良いような見所などを教えてくれたり、ジンバブエの人たちの日常の様子や食事の違いなどユーモアたっぷりに話してくれた。近代的な街中の風景の説明やショッピングセンター、郵便局などがあることも教えてくれた。しかし、町を離れて郊外に行くとそこには、豊かな自然や生活の違いがあることなどを写真を使って丁寧に説明してくれた。児童たち全員が、西村さんのお話を興味をもって集中して聞いていた。

○ 心肺蘇生法講習会

同じ日、講演の後、体育館に移動して心肺蘇生法講習会が行われた。三好消防署から講師を派遣してもらい、保護者と児童（４～６年）に実技指導が行われた。

○ オープンスクール

いつもは、平日に行っていたオープンスクールであるが、昨年度は、保護者も参観しやすいということから土曜授業の時間に入れてみた。



土曜日にオープンスクールを行ったことで、例年よりも保護者の参加が多かった。高学年は、３時間めがスマホ・ケータイ安全教室であったが、保護者にも協力してもらいながら親子ともに学習していた。内容は、インターネットの便利なところや注意するところを知り、コミュニケーションツールとして使うときのマナーについてもしっかりと学習していた。午前中で放課になるので下校時も保護者と一緒に帰る児童も多く見られた。

○ ふかし芋試食会



１１月１４日は、天候が悪く予定していた焼き芋集会を延期して、１，２時間めの授業後にふかし芋試食会を３時間めに体育館で行った。自分たちが育てたサツマイモなので格別の味であったようだ。

○ ふるさと探訪（グループハイキング）

12月5日、「ふるさと探訪」を行った。保護者、地域老人クラブである長寿クラブや婦人会をはじめとする地域の方を巻き込んで、地域を知る活動を取り入れた。保護者や地域の方と共に異学年の児童で構成した班（仲良し班）で回った。それぞれのポイントには地域の人が待っていてくれて、各場所でポイント地点に関するクイズやゲーム、説明や作業などを行った。大人から子どもまで興味を持って楽しめた活動であった。また、子どもたちは全員が協力して約2キロの道のりを仲良く声をかけながら回り、途中みんなで歌ったり、俳句を作ったりしてのびのびと思う存分活動していた。



コースについては、教職員が何度も歩いてチェックしたり、危険な箇所を確認した。また、ポイントの担当者との打ち合わせも十分に時間をかけて行った。当日は、保護者や地域住民との協力体制がすばらしかったと思われる。地域の人と物を効果的に活用し、内容が豊かであるとともに多くの目で見守る安全性の高い活動となった。今年度は昨年度の反省点を生かして改善していく予定で、参加者全員が、それぞれに楽しく活動が出来た。

ふるさと探訪の4つのねらいは、(①集団活動を通して、協力し合い、親睦を図り、よりよい人間関係を養う。②異年齢での活動を通して、上級生への信頼感と下級生をいたわる思いやりの心を養う。③ふるさと「辻」を愛する気持ちを高める。④公衆道徳や交通ルールを守り、事故防止に努め、体力を養う。) 概ね達成できた。

○ 防災学習

年度が変わり、本年度の6月には、商工会女性部井川支部と連携して、3年生以上の児童を対象にした防災講習会を行った。

「学校・家庭・地域が連携して地域のハザードマップの見直し」

これは、防災意識を高め、災害発生時の被害を予測し、迅速・的確な避難がとれるようにすることを目的として取り組んだ。通学地区ごとに児童と保護者が11のグループに分かれ説明を聞いた。クイズや作業を行ったりしながら学習する。それぞれの地区のことを一緒になって考えながら、親子で防災学習に取り組んでいた。

「非常食の試食会」

その後、地域の危険な場所のことや災害時の留意点や心構えなどを地域の防災指導員からお話をいただいた。専門的な内容であったにもかかわらず、身近な話なので、皆真剣に耳を傾けていた。

土曜授業の活動として、防災学習を商工会等地域の団体と連携して行ったことに意義があると思われた。

○ 感想と考察

実施された活動から、子どもたちに地域の歴史や自然への興味・関心が高まってきたように思う。地域の人たちや異年齢の子どもたちと交流し、これまで気付かなかったことや知らなかったことを知識として吸収したり多様な価値観に触れたりすることができ、実生活、実社会とのつながりを持つ貴重な経験となったようだ。体験を通して学ぶことへの意欲が高まったと思う。

また、計画や準備の段階から地域と学校が密接に連携することが日常的に行われていた。そして土曜日とあって保護者や地域の方の参加が多く、学校を知っていただく良い機会となっていた。開かれた学校が、そこに展開されていた。この成果を積み重ねることによって、子どもたちの主体性を引き出し、実社会で役立つ力を培う学習の時間としても土曜授業が位置づけられてくるのではないかと考えられる。また、辻小学校では学力向上に向け、基礎学力の定着と学力調査等の結果から見てきた課題克服をめざす時間として土曜授業を活用している。

土曜授業を行うことで、家庭や地域からの来校者が増え、様々な人々の参加による充実した活動ができるとともに学校と家庭や地域の交流が増え結びつきが強くなっていると感じる。計画や準備は今まで以上に大変であったと思うが、通常の授業では取り組めない体験ができた。子どもたちは地域の人と地域の中で体験学習をすることで、自分の町の歴史や自然への興味・関心が深まり、実生活、実社会とのつながりを体験できたように思う。

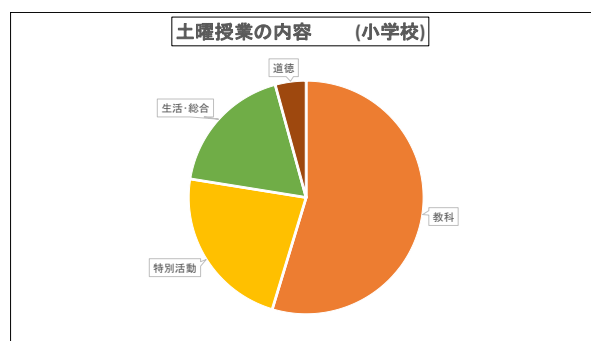
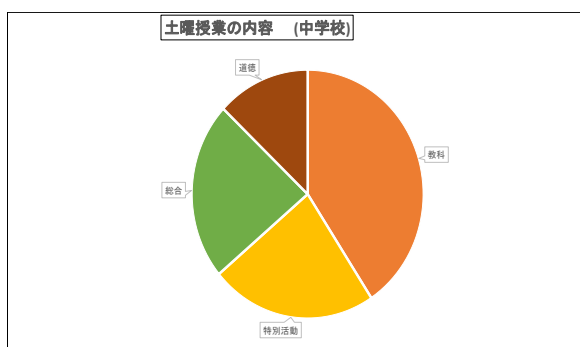
家庭や地域を巻き込んだ土曜日を活用した実践の成果は大きかったが、今後も無理なく継続していくためには、その方策を練る必要があると考える。辻小学校での取り組みに昨年の5月より参加させていただいたが、新しい取り組みである土曜授業について、学校現場の多大な苦労や少しでも大きな成果を出すための学校の工夫と努力を身をもって感じ取ることができた。

(2) 土曜授業に関する調査について

土曜授業について、三好市内全小中学校を対象にアンケート調査を実施し、自然体での取り組みの様子や成果と課題について考えてみた。(調査期間平成27年12月～平成28年3月)

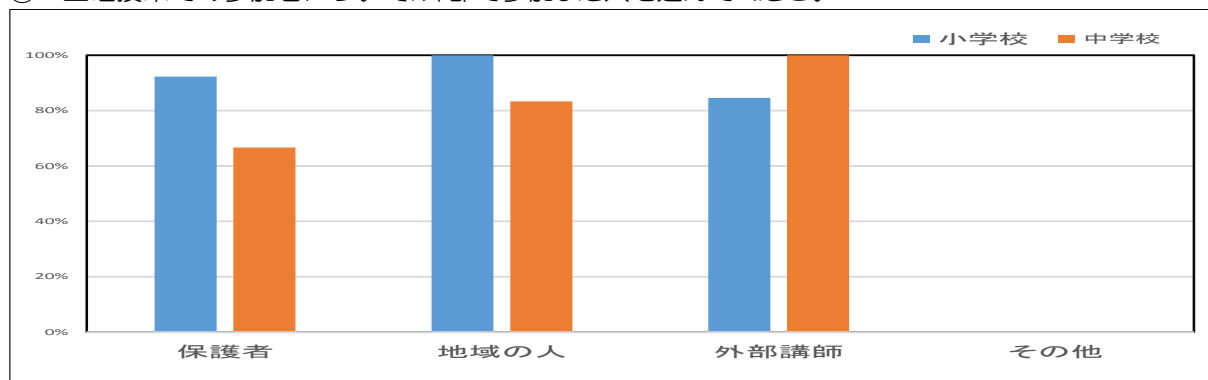
1 授業内容について

① 平成27年度の土曜授業での年間を通しての授業内容について尋ねます。授業内容に合うものを選んでください。(教科学習, 特別活動, 生活・総合, 道徳)



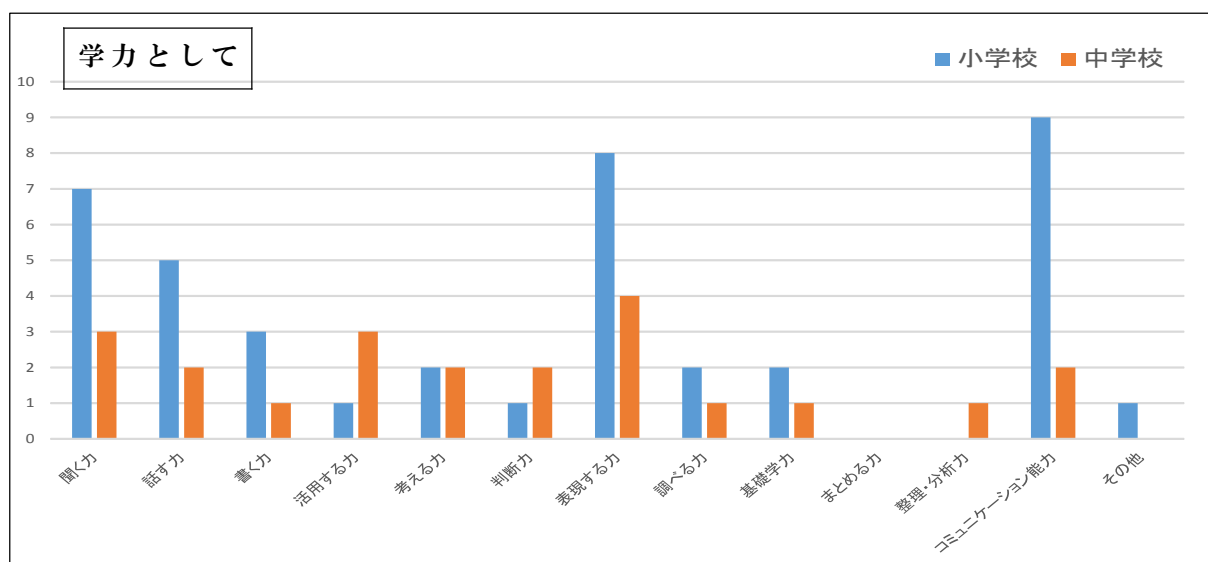
◎ 学習内容は全体的に見て教科学習の時間と生活・総合的な学習, 行事など特別活動等に当てられ、通常の授業日の内容とほぼ同じである。

② 土曜授業での参加者について、外部で参加した人を選んでください。

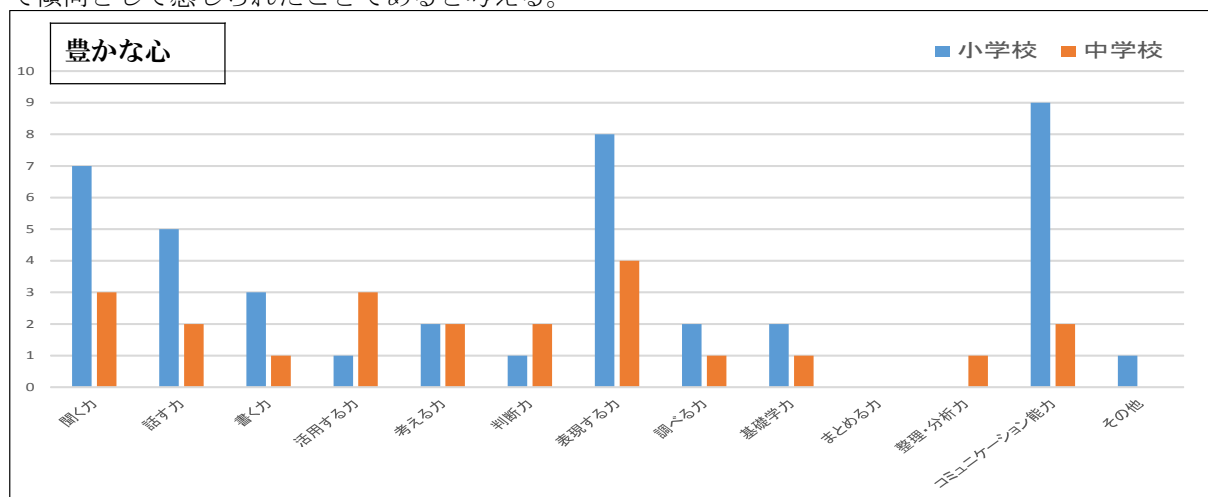


◎アンケート調査からもわかるように市内各校が招いたり、参加を呼びかけたりした方々の割合で、各校では、子どもたちが多くの人々と交流し、多様な考え方や価値観に触れる機会を設定しているということがよく分かった。

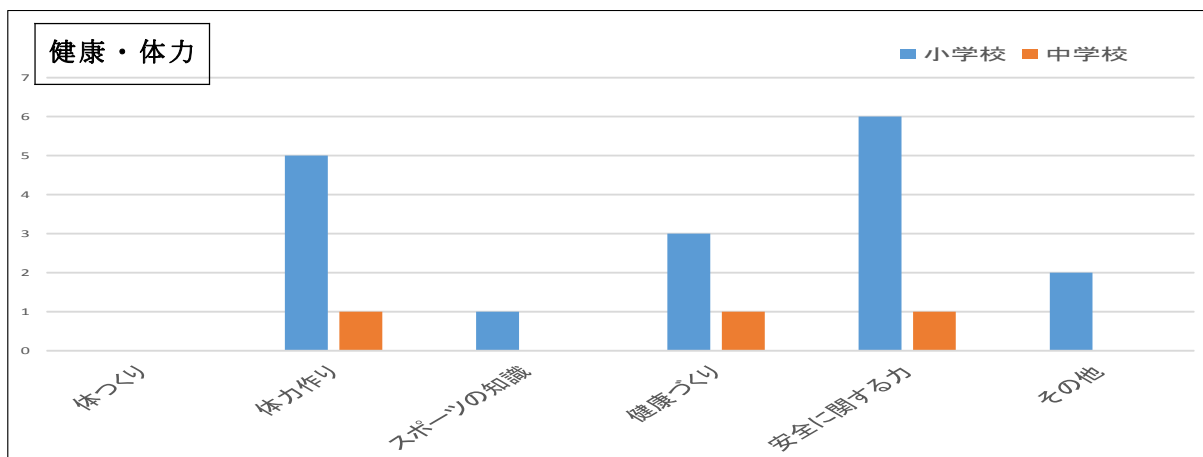
③ 土曜授業で子どもたちが伸びたと思われることは何でしょう。



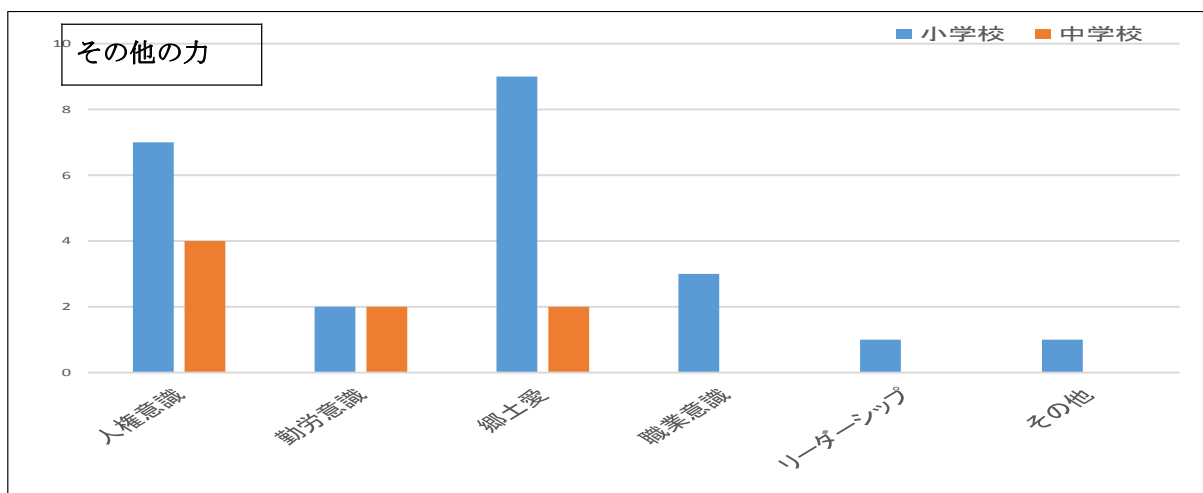
◎小学校が、コミュニケーション能力や表現する力・聞く力が多く、中学校では、表現する力や聞く力・活用する力が伸びていると回答されている。実施1年という短期間の取組における調査であるので傾向として感じられたことであると考え。



◎豊かな心では、小学校・中学校ともに「他者と協力する力」や「他者と思いやる心」の育成が図られた。これは、グループ活動や取り組みの中での話し合いや交流が増えたことによると思われる。



◎活動の内容によって、安全に関する力がつけられるとともに体力づくりとなったり健康に対する関心が高められたりした。



2 土曜授業を取り入れて良かったこと(一部抜粋)

- ①授業時数が十分に確保できた
- ②家でゲームしていた子どもの学習時間が増えた
- ③外部講師や地域の人材を活用した体験学習により児童の健全育成が図れた。
- ④企画の段階で、アイデアを出し合って決定した。
- ⑤土曜授業日を参観日とした。4回実施(保護者の出席率が増加した)
- ⑥地域の方々や中学生と交流する機会が増えた。
- ⑦保護者や地域の方と一緒に体験的な学習ができたこと。
- ⑧普段の授業では、なかなかできない授業を、時間的なゆとりをもって行うことができた。
- ⑨普段できない学習を十分な時間をとって取り組めたこと。
- ⑩子ども達に多様な体験をする時間が確保できた。
- ⑪ 地域との協働により、行事や授業に意欲的に取り組むことができた。
- ⑫ 豊かな心や郷土愛を育む色々な行事を実施し、児童の成長につながっている。
- ⑬心の成長という視点では、意義がある。
- ⑭ 振替休業日をもうけずに、行事や参観日をおこなうことができる。

- ⑮小学校との連携が強化された。
- ⑯ 保護者の協力により、学校との結びつきが強まった。
- ⑰ 多くの体験により、行事に対する生徒の積極的な取り組みがみられるようになった。
- ⑱教科の授業時数を削らずに、外部の講師を呼んだり、体験学習が行える。
- ⑲行事実施日を意図的に土曜日に設定することができた。
- ⑳土曜日に行われている地域の行事に参加しやすくなった

3 土曜授業を取り入れて苦労したこと(一部抜粋)

- ①スポ少との土曜授業の調整
- ②社会体育の試合のための欠席が3日あった。県下一斉の土曜授業でないことのしわ寄せがきている。欠席のある日は、学力向上・体力向上にすこしでも役立つ補充学習の日と割り切っている。
- ③可能な限り、事前準備に負担をかけないようにしたかったが、準備等が大変だった。
- ④地域の人材発掘
- ⑤日曜日に行事が組まれている上に土曜授業実施となると登校日・勤務日が続き、子どもの健康面への配慮が必要であった。
- ⑥仕事で学校へ来ると、平日同様勤務時間を過ぎても仕事が終わらず、結局は一日出勤とあまり変わらない。
- ⑦ 行事開催にむけての準備
- ⑧土曜日、仕事を休めない保護者への対応
- ⑨ 講師先生の日程調整
- ⑩ 土曜授業で学ぶ内容をどのように設定するか。
- ⑪土曜授業の趣旨が「生徒たちに社会体験や自然体験などの様々な活動を経験させ、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくむ」ととらえていたので、1年目は、体験的な学習や外部講師を招聘することに重きをおいたため、計画に手間がかかった。
- ⑫効果的に生かすよう土曜授業の内容を決めるに当たって苦労があった。
- ⑬計画した内容を諸事情により変更するとき、内容を決めるに当たって苦労があった。
- ⑭土曜日に外部講師を依頼したりするときに、講師の方がお休みの日であったり、他の学校と重なる場合があり、企画がしづらい。
- ④県の行事や大会と重なる場合もあり、どちらかを犠牲にしないといけない場合がある。(そのために、教科をいれるなど市教委は指示するが、特活や総合的な学習の時間なども一人もかけてはならない大切な時間である)

◎児童・生徒の成長を支えることを目指して、学校・家庭・地域が連携し、授業や地域における多様な学習、文化やスポーツ、体験活動などに取り組むことは準備など大変であるが、子どもたちの成長に役立つものであった。

◎実際に土曜授業を行うためには、それによる教員の代休をどう確保するか、中学校では定着している土曜日の部活動や大会・対外試合などをどうするか、など多くの課題が見えてきた。

4 市内各校の実践事例紹介

土曜授業の実践例 (下名小学校)

本校では食を通して地域の人々や保護者と触れ合う機会を「妖怪マルシェ」と名付け、地域学習に取り組んでいる。

10月3日の土曜授業日に第2回目となる「妖怪マルシェ（親子料理教室）」を開催した。事前に夏休みの課題として、「アイディア丼」を募集した。地元の妖怪伝説をアピールするものや、地元の食材を使ったものを考案するよう指導し、全児童が家庭に持ち帰り、課題に取り組んだ。

16作品の中から本校卒業生である「ホテル大歩危峡まんなか」大平副料理長がグランプリ作品を選考した。グランプリの他に優れた作品として「食欲そそるで賞」と「おいしいキャラで賞」の2つの賞を設け、合計3名の児童が受賞することとなった。当日まで受賞者については内密にしておき、児童はわくわくした気持ちで当日を迎えた。

妖怪マルシェ当日、はじめに表彰式を行った。学校で作成したオリジナルの表彰状が、大平副料理長から手渡された。モニターやBGMを使用しながらの本格的な表彰式に児童は胸を高鳴らせていた。見事グランプリに選ばれたのは、怪力の妖怪「山爺」をイメージして考案された「やまじち丼」である。地元の食材であるぜんまいや椎茸を使用していることや、ふるさとの妖怪伝説を愛する心が伝わってくる作品であったことからグランプリに選ばれた。参加者は、大平副料理長に教えてもらいながら椎茸やすだちといった地元野菜や、油揚げ・ウインナーなどを調理した。特産のぜんまいの煮しめや鶏のそぼろを使ってやまじちの姿に見えるように、楽しみながらご飯の上に盛りつけをした。

調理後には参加者全員で試食をした。親子料理教室で作った「やまじち丼」の他に、大平副料理長より手作りの「そば米汁」と「水羊羹」が提供された。郷土料理である「そば米汁」はそばアレルギーの影響があり学校給食で提供されることが少なくなっている。この機会に郷土料理を味わってほしいとの大平副料理長の思いから「そば米汁」を提供していただけることになった。食後に大平副料理長より食に関する講話があり、参加者は真剣なまなざしで耳を傾けていた。

近年は食が簡素化され、地元の食材や郷土料理の良さが忘れ去られるような時代となっている。そんな時代だからこそ改めて食について見直し、地元の食材や食文化をまもり続けてほしいという内容であった。地域に目を向け、ふるさとを愛する心の成長が見られる取り組みとなった。



ふれあい餅つき・親子料理教室

12月5日土曜授業において、ふれあい餅つき・親子料理教室を実施した。保護者や長寿クラブ・三好市食育コーディネーターの皆さんと連携し、「食」をテーマにした体験学習に取り組んだ。

◇ふれあい餅つき

地域の長寿クラブの方々とPTAの皆さんのご支援のもと、園児・児童が餅つき体験を行った。用具の調達や事前の諸準備にもご協力いただき、準備万端当日を迎えることができた。経験豊富な長寿クラブの皆さんの手際よい姿に子どもたちからは感嘆の声があかった。長寿クラブの皆さんとの連携により、親子で伝統文化を体験することができた。



◇親子料理教室

三好市食育コーディネーターの皆さんにご指導いただき、親子料理教室を行った。実施にあたり、本校の食育担当者と食育コーディネーターが事前に打合会をもち、実施計画の立案を行った。今年度は、徳島県の郷土料理「いりめし」「ふしめん汁」に挑戦した。



できあがった料理は、つきたてのお餅とともに、子どもたちや保護者、長寿クラブ食育コーディネーターの皆さんと一緒に試食した。楽しい会話を交えながら、おいしくいただいた。

◇ 本校の子どもたちの成長を心から願い、温かく見守ってくださる地域の方々との交流を通して、子どもたちはたくさんの方々から大切にされていることを実感するとともに、まわりの人への感謝の心が育っている。保護者からは、「子どもと楽しく活動することができた。」という意見がきかれ、地域の方々との連携を図ることで、より体験学習が充実したものになった。年間の教育活動を見通し、さらに土曜授業が子どもたちの学びにつながるように今後も活動内容の工夫に努めたい。

土曜授業の実践例 (吾橋小学校)

- 1 実践内容 「避難所体験・出前キャンプ」
- 2 期 日 平成27年10月3日(土)
- 3 講 師 県防災人材育成センター
- 4 参加者 児童, 保護者, 老人クラブ, 婦人会, 教職員 計33名

5 活動内容

- ① 避難所作り (自分の避難所を作ろう！)
ダンボールベッド, トイレ作り
- ② 応急手当て, 毛布担架作り 等
- ③ 炊き出し, 食器作り
ドライカレー, 炊き込みご飯
ミートソースマカロニ, むしパン
- ④ 避難シミュレーション

写真 (取り組みの様子)



6 活動の様子及び成果と課題

- ・ 県防災人材育成センターより募集のあった「避難所体験・出前キャンプ」に応募し, 実施することができた。本校では, これまでも地域ぐるみの防災学習を行っており, 保護者をはじめたくさんの地域の方々が参加くださっている。今回も老人クラブや婦人会からも参加してくださり, 学校と地域が一体となった有意義な学習ができた。
- ・ 「避難所作り」では, ダンボールの準備段階から保護者の方々が協力してくださった。家族を基本として, 子どもから高齢者までのグループ編成をし, それぞれがアイデアを出し合いながら「避難所作り」を行った。各グループで完成した避難所を紹介し合いながら, 家族が気持ちよく, 便利に使えるための避難所作りのスキルやアイデア等を学ぶことができた。
- ・ 「炊き出し」では, これまでカレーライスが多かったが, 新しいメニューを数種類作って, シェアしながら食べることにより, 協力することの大切さや楽しさなどを学ぶことができた。
- ・ 「避難シミュレーション」では, 散乱した障害物コースを避難したが, 障がい者や高齢者等, 多様な立場の人々を安全に避難させることの大切さやスキル等を学ぶことができた。
- ・ 事前準備等に多くの負担をかけないようにしたかったが, 僻地ということもあり, ダンボール収集や炊き出しの材料購入等が大変であった。また, 活動が盛りだくさんで, 終了予定時刻が2時だったので, 後片付けが終わると3時過ぎになってしまった。なお, 超過勤務した時間については, 内規で勤務日に早く退庁してもらったが, 規定の勤務時刻に退庁できるよう計画すべきだった。

土曜授業の実践例 （ 西祖谷中学校 ）

◎実施した教育活動の中から1つ紹介してください。

＊写真の提供もお願いします。

6月6日（土）本校の特色である「英語でおもてなし」の第1回目の活動を実施した。本来は、11月にホテルでの「接客活動」に照準をあわせた活動であったが、昨年度に環境美化教育優良校等表彰の授賞式で、他県との意見交換をした際に、「缶バッチ」の存在をしったこともあって、昨年3月に二種類の缶バッチを作成した。さらに、副賞の賞金で、ジャンパーも作成した。

5月には外国人観光客からの要望があった「国見山」への登山道の案内を「英語のマップ」に入れるため、生徒全員で登山を行い、さらに「かずら橋周辺の地図」も外国人観光客の要望に応じて改訂を行った。

その成果を6月6日（土）に、清掃活動、マップ配布活動、缶バッチ販売の活動で試してみた。

そこで、新たに生じた課題を本来の11月のホテルでの活動に生かした。



（かずら橋でのマップ配布）

土曜授業の実践例

(箸蔵小学校)

◎ヴォルテスサッカー教室

平成27年11月7日(土)

徳島ヴォルテスが県内各校で実施しているサッカー教室を実施してくれました。1～3年生と4～6年生に分かれてそれぞれ1時間ずつ指導してくれました。サッカーのテクニックだけでなく、スポーツを通して友達とのかかわり方やチームワークの大切さを教えてくれました。友達とのかかわり、協力しながらスポーツの楽しさを味わうことが出来ました。



◎校内マラソン大会

平成28年2月6日(土)

毎年恒例で実施している校内マラソン大会を、今年は土曜授業日に実施しました。

天候にも恵まれ、低学年は、1.4km、中学年は、1.7km、高学年は、2.1kmのコースで、12月から続けてきた練習の成果を発揮してがんばりました。

P T Aの役員や交通安全協会、駐在所、地域の安全を守る会の方々が交差点や道路上に立って安全指導をしてくださいました。また、保護者や地域の方々がたくさん応援にかけつけてくれ、その声援をうけて、全員完走することができました。



低学年のスタートの様子



折り返し地点(高学年)

土曜授業の実践例

(東祖谷小学校)

通常の土曜授業は、小中での連携活動を取り入れている。11月は、小学校単独実施のため、総合的な学習の時間・生活科として、地域のよさを生かした体験的活動した。

■実施日 平成27年11月14日(土) 8:30～11:00

こんにゃく作り【5・6年生】

祖谷の特産品「こんにゃく」の原料であるコンニャク芋を5・6年生が栽培している。学校支援ボランティアとの協力により、植え付け・収穫をし、11月にこんにゃく作りを土曜授業として行った。

作業工程としては、①芋の皮を剥く②芋をゆがく③ミキサーで攪拌する④灰汁（あく）を入れて混ぜる⑤丸める⑥こんにゃくをゆでる。①②は、前日にボランティアさんをお願いし、学校では、③④⑤の作業を行った。

灰汁（あく）を入れる工程は、ボランティアさんにコツを教えてもらいながら活動した。形成する時は、大事そうに丸め、そうっと鍋に入れてゆがいた。

作ったこんにゃくは、刺身にして食べた。とろっとして生芋こんにゃくはまさに絶品。子供達も郷土の味わいに満面の笑みを見せていた。



もちつき【1～4年生】

体育館では、もちつきを行った。ボランティアとして、青年団の方に来ていただいた。もちつきの模範を見せていただいた後、全員が杵を持って、もちつきの体験をした。

できあがった餅は、小さく丸め、白餅や餡餅にした。餡を入れる体験は、初めての子もいて苦労しながら取り組んでいた。

試食は、きなこをつけたり、ピザ風に焼いたりして参加者全員で楽しんだ。



終わりに

今年度、地域の中で、地域とともに、地域のよさを感じることができる空間にしたいと考え土曜授業に取り組んできた。今後も、学校支援ボランティアや関係機関との協力により、活動の幅を広げ、地域に根ざした教育を推進していきたい。

5 土曜授業の成果と課題

三好市の土曜授業は、主に「教育課程内の授業」が行われている。今年で2年目となる土曜授業であるが、その内容は、教科学習のほかに地域・保護者・学校が連携した多様な活動が行事や総合学習として取り入れられている。土曜日ならではの新しい活動に取り組んでいる学校も多くあった。このことについて、先に示したように1年間実施してのアンケート調査をすると各校から意見や課題がたくさん寄せられた。

成果として、授業時数の増加を学力向上に活かしたことや保護者や地域の方と一緒に取り組む豊かな体験活動が展開されるなど子どもたちの土曜日の生活が充実したものになってきたことやことがあげられる。また、子どもたちがそれらの活動により郷土のことを知り郷土に愛着を持つことができるとともに、地域の自然や人や自分を誇りに思えるなど児童の心の成長がみられたとことも素晴らしい。

しかし、土曜授業と社会体育との兼ね合いや中学校の部活動に関する県以上の大会や他校との対外試合等との調整に課題があるようである。また、土曜授業を行うとき、特に外部の団体や地域の人と連携した活動を実施するときにはどうしても学校に負担がかかる。その他の授業も含めて、土曜授業実施にかかる校務に要する時間は土曜勤務の時間以上に増加している。教員が健康で心身ともにゆとりをもって子どもたちの指導に当たることができるよう、勤務状況の厳しさを改善していくことも今後の大きな課題と言える。

6 おわりに

市内小中学校の土曜授業の実践は2年目が終わろうとしている。これにより、子どもを中心に学校と家庭、地域の連携がより深まり、地域における多様な学習や体験活動が活発になっている。地域の中の学校、地域とともにある学校の姿がこれまで以上に見られるようになった。再開された土曜授業は、その効果を上げるために評価と改善を繰り返しながらその実践が進められると考える。

さらに、子どもたちを育成するには、学校だけでは限界がある。絵画、英語教室のような地域の教育人材を活かしたり、専門的な技術・能力を持つ企業・大学等などが主催したりする「土曜学習」などの拡大も望まれる。

土曜授業についての研究を終えて、子どもたちの土曜日を含めた日常がより充実し、将来、地域社会の中で多くの人と交流し豊かに生きる力を身につけてほしいと強く願っている。

研究主題 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育
～見て、考えて、表して、意見を交わす～

三好教育研究所 研究員 宮成万寿美

1 はじめに

美しいものを見て感動したり心を癒されたりすることは、美術の素晴らしさのひとつである。鑑賞の活動を通して見ることや味わうことの楽しさを知り、美しいものを心から美しいと感じられる豊かな感性を身につけてほしい。そして、生涯にわたり美術を愛好し心豊かに生きてほしいと願う。

2 研究のねらい

これまで、美術科では、表現や鑑賞の幅広い活動を通して、創造することの楽しさを感じながら、造形的な創造活動の基礎的能力（想像・発想・判断する力や表現する力）を伸ばすとともに、生活の中の造形や美術文化に関心をもち、美術を愛好する心情や豊かな感性を育成することを目指して、教育の充実を図ってきた。

しかし、一方では、子どもたちの感受性や美的実体験の希薄化、また、自尊感情やコミュニケーション能力の低下が懸念される今日である。感性や想像力を豊かに働かせて様々なことを感じ取りながら思考・判断し、表現と鑑賞の能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術文化について実感的な理解を深め、生活や社会と積極的に関わる態度を育成することなどについて、更なる充実が求められている。その中でも特に「感性や想像力を働かせ、対象や事象を形や色彩などの造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすこと」が重視され、より一層「豊かな感性と表現力」が求められている。

「感性」とは「様々な対象・事象からよさや美しさなどの価値や心情を感じ取る力」である。人は「見る」ことでたくさんの刺激を受ける。美術科においては、自然物や身の回りの造形のよさや美しさ、造形的な作品が訴えかけてくる何かを自らの感覚で感じ取り、その感動を拠り所として感性を育てていく。そしてそれらが造形的な創造活動の基となっていく。しかし、美術への興味関心が少なく作品の見方も分からなければ、感性を十分に働かせてよさや美しさ感じ取ることは難しい。美術を愛好する心情や豊かな感性を育成するためには、美術への興味関心をもたせるとともに、発達段階に応じた早い時期からの鑑賞経験や幅広い作品の鑑賞経験が重要な意味を成すことは言うまでもない。

また、鑑賞の活動は自分の中に新しい価値をつくりだす創造活動であるとも言われる。知識を習得するだけの受動的な学習ではなく、自分から積極的に作品に関わっていく能動的な学習でなければならない。鑑賞の活動を通して豊かな感性を育むには、子どもたちの美的感覚を刺激し「見ること」への興味関心をもたせるような題材を選択すること、また、人や物、事、そして何よりも自分との関わりの中で自分としての意味や価値を発見していくような主体的な学びや体験を重ねていくことが重要であると考え。視覚だけでなく自らの目や手を使ったり五感を十分に働かせたりしながら、形や色彩などからそれらの性質や感情、イメージなどを豊かに感じ取る学習（造形的な視点について実感的に理解できる学習）、自分の経験や表現活動と結びつけ、想像を膨らませて作者の心情や意図を感じ取る学習（作者の思いについて共感的に理解できる学習）、自分の思いを語ったり自分の価値意識をもって批評したり、同時に他者の多様な思いを受け入れたりする対話的な学習（意見を交わし自分の価値意識を確認できる学習）の充実を図り、「見る力」や「感じ取る力」を育てたいと思う。

3 調査研究の概要と仮説

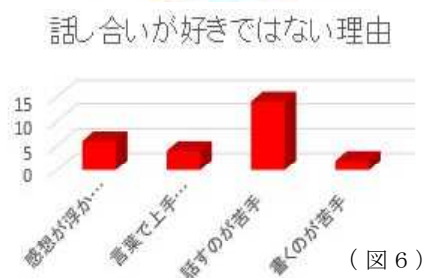
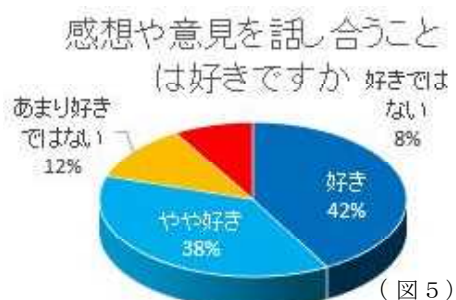
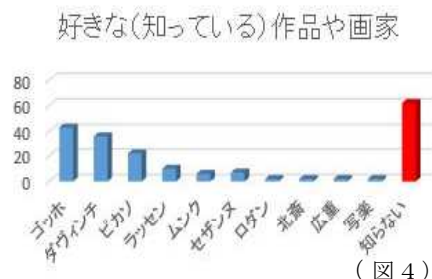
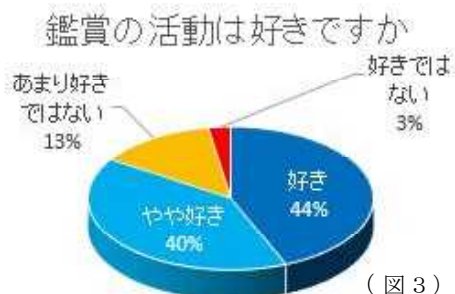
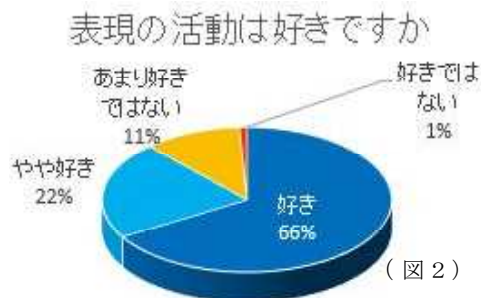
三好郡市の小学校20校教員100名を対象に図画工作科の授業実践について、また、三野地区と山城地区の小学校5校の高学年の児童119名を対象に図画工作科の学習についての意識調査を実施した。

(1) 児童へのアンケート調査により

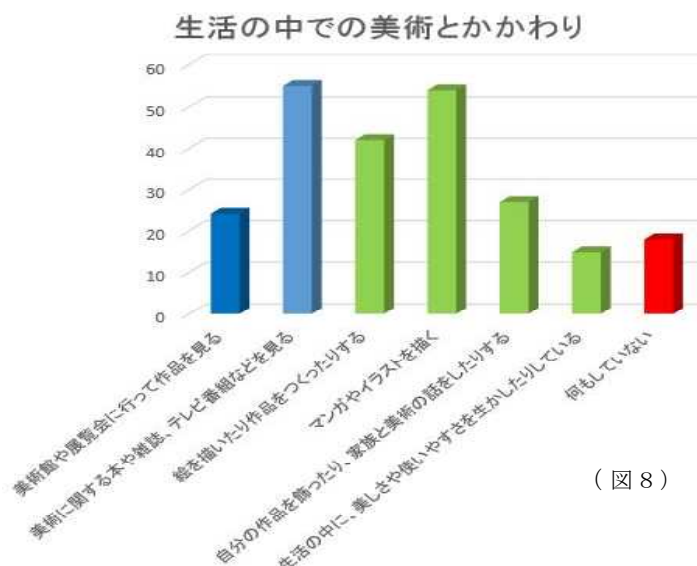
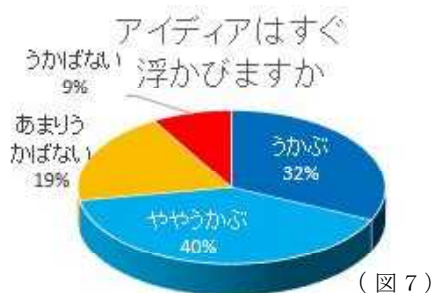
「図画工作の授業が好きですか」という質問に70%（やや好きを含むと93%）の児童が好きであると答えている（図1参照）。「表現の活動」については66%（図2参照）、「鑑賞の活動」については44%が好きと答えた。（図3参照）多くの子どもたちが図画工作科の学習を楽しみに前向きに取り組んでいることが伺えるが、鑑賞活動での満足感が表現活動のそれに比べるとかなり低いことが分かる。

鑑賞の活動において、作品の相互鑑賞についての肯定的な感想は多く見られたが、美術作品の鑑賞についてはあまり印象に残っていないのか「好きな画家（作品）や知っている画家（作品）」を問う項目では32%の児童が作品名や作者名をあげることができなかった（図4参照）。有名な美術作品や誰もが知っているであろう画家の名前が思い浮かばなかったことは非常に残念なことである。地域環境として近くに美術館等の施設が少ないという実情もその要因の一つであると推測されるが、だからこそ、図画工作科や美術科での鑑賞活動の必要性を強く感じる。

また、20%の児童は「作品を見て感想や意見を話し合うこと」が好きではない又はあまり好きでないと答えている（図5参照）、その主な理由として「話すのが苦手」「感想が浮かばない」「言葉で上手く表現できない」などと答えている（図6参照）。「感想が浮かばない」というのは、本当に「何も感じない」のではなく、「どんなことをどう表せばよいか分からない」という鑑賞経験の少なさ、あるいは「作品をよく見ようとしていない、作品から何かを感じ取ろうとしていない」という興味関心のなさが問題であると思われる。短期間で豊かな感性を育成することは難しいが、言語表出やコミュニケーションスキルについては、鑑賞経験や言語活動の充実を図った学習の積み重ねにより向上すると考える。

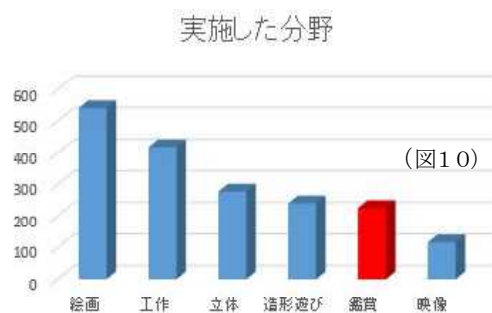
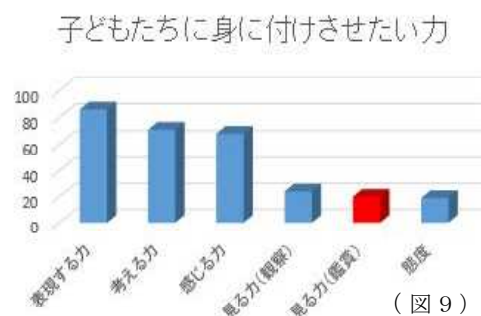


表現と鑑賞（発想力と日常生活での美術との関わり）の関係性から見てみると、「表現活動においてアイデアがすぐ浮かぶ」（図7参照）と答えた児童の多くは「美術館に行く」「美術に関する本やテレビ番組を見る」「絵を描いたり作品をつくったりする」「マンガやイラストを描く」と答え、逆に「アイデアが浮かばない」と答えた児童は美術との関わりが希薄な傾向があり（図8参照）、表現経験と同様に鑑賞経験と発想力にはある程度の相関性がみられた。「見る」ことが発想の源になっていることが、アンケート結果からも考察される。



(2) 教員へのアンケート調査や聞き取り調査により

「図画工作の指導で子どもたちに身に付けさせたい力」を問うと、「表現する力」が30%で最上位で、次いで「考える力」や「感じる力」となっており、「鑑賞の力」は7%と低い値であった（図9参照）。「前年度実施した分野」は、「絵画」が31%で最も多く、「工作その他を含む表現活動」が88%を占めるのに対して、「鑑賞」は12%であった（図10参照）。「年間を通して鑑賞教育に取り組んだ回数」から見てみると、3～4回が79%と最も多く、実施していないという回答もあった（図11参照）。実際のところ、表現活動にはある程度の時間を必要とするため、鑑賞の学習に多くの時間を割くことができないということもある。安易に数値だけで比較することはできないが、実質的に鑑賞活動は表現活動に比べて軽視されている傾向にあることが分かった。



聞き取り調査からも、限られた授業時数の中で、作品展への出品や各種絵画ポスターのコンクールへの応募等作品の制作に追われ、鑑賞にまで手が回らないという声が多く聞かれた。



「鑑賞の位置付け」としては、「表現活動の導入やまとめとしての作品鑑賞」が80%を占めるのに対して、「美術作品の鑑賞」は20%であり、高学年においてもあまり美術作品の鑑賞が実施できていないという現状や教員による取組の差が明らかとなった（図12参照）。

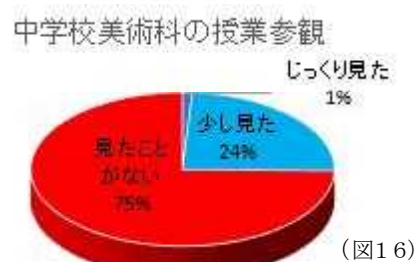
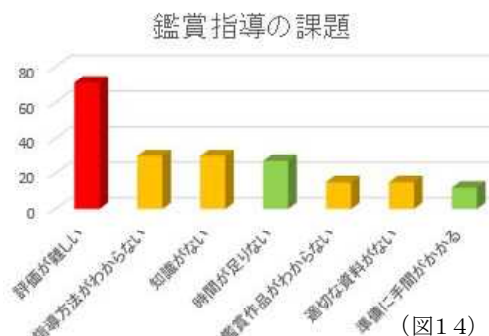
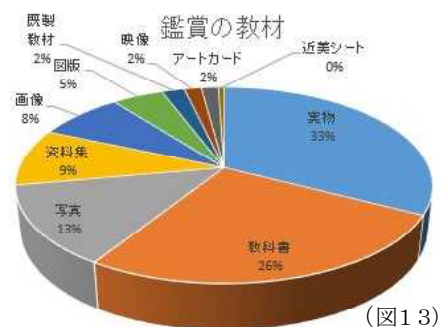
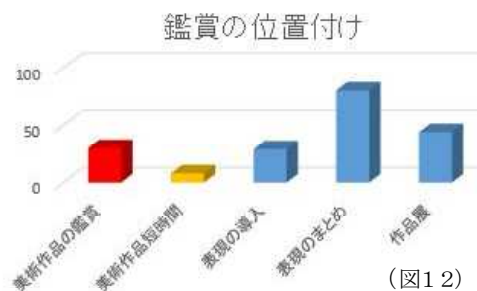
「鑑賞の教材」として多く使用するものは、上記の結果からも分かるように、「生徒作品実物」が33%、次いで「教科書」が26%と圧倒的に多く、「アートカード」や県立近代美術館の「鑑賞シート」など新しい教材は意外と使われていないことが分かった（図13参照）。

また、鑑賞の学習について様々な課題があげられるなか、「評価が難しい」「授業展開や指導方法がわからない」「鑑賞する作品が分からない」「適切な資料がない」「知識がない」といった指導上の問題点が多く見受けられた。

（図14参照）聞き取り調査からも、専門の教師が少なく研修の機会もあまりないことから、どのように指導すればよいのか分からないとの声が聞かれ、教員の鑑賞指導に対する苦手意識が感じられた。

小学校図画工作科と中学校美術科の連携の視点から見てみると、「美術科の学習内容」について96%の教員が知らない又はあまり知らないと答え（図15参照）、実際に「美術科の授業を見たことがある」と答えたのは25%で、残り75%の教員は一度も見ることがないという結果であった（図16参照）。

「美術科における小中の連携」について、81%の教員が様々な観点からその必要性を感じているものの、実際に実践となると、その内68%が連携は困難であると答えている（図17参照）。多忙な学校現場において、時間の確保や準備打合せなど実践に至るまでの労力がその大きな要因となっているのではないかと考える。



連携の必要性を感じる理由としてあげられたものは次のとおりであった。

- 年齢に応じた思考や技能を身に付けるため、発達段階に応じた継続的・発展的な指導が行われるべきだから
- 中学校で必要とされる技術・能力を知っていれば、小学校で身に付ける力が分かるから
- 題材の関連を考慮し、題材や指導方法の選択ができるから
- 専門的な指導（児童・教員）が必要な面があるから
- 小学校から中学校への接続を円滑にするため

これらの調査研究をふまえ、小学校図画工作科において、仲間との関わりを通して主体的な学びや言語活動の充実を図り、豊かな感性を育む鑑賞教育を目指して、次のような仮説を立て本研究に取り組んだ。

- 【仮説①】 教材の開発や遊びの要素を取り入れた学習など指導方法の工夫を図ることで、造形要素について実感的に理解するとともに、「見ること」に興味関心をもち、積極的に作品に関わり主体的に鑑賞しようとする態度を育てることができるのではないか。
- 【仮説②】 表現活動との関連を図り、自分の経験や表現活動と結び付けることで、イメージや想像力を膨らませて作者の心情や表現意図を共感的に感じ取ることができるのではないか。
- 【仮説③】 自分の感じたことやイメージを言葉で表す言語活動や、自分の思いを伝えたり仲間の思いを受け入れたりする対話的な学習の充実を図ることで、自分の考えを明確にするとともに多様なものの見方や感じ方に気付き、自分としての新しい意味や価値を創り出すことができるのではないか。

次にあげる実践は、文部科学省の指定を受け、山城地区の小学校で研究を進めている「人口減少社会におけるICTの活用による教育の質の維持向上に係る実証事業」での遠隔合同授業（山城小学校、下名小学校、政友小学校の3校による合同学習）への出前授業の実践例である。



4 授業研究の実践

(1) 題材名「みつけてみよう、みつめてみよう、表してみよう」～「見る」楽しみを感じて～

(2) 題材のねらい

本題材では、多様な表現の作品を鑑賞することにより、まず「見ることっておもしろい、もっと見たい、知りたい」と思えるような作品との楽しい出会いをつくりたい。少しでも美術作品を身近に感じさせ、作品の見方が分かり、見ることや味わうことの楽しさや喜びを感じさせたい。そして「私はこの作品（作者）のここが好き」と自分としての意味や価値を見だし、自己の思いや考えを自分の言葉で伝えることのできる鑑賞の能力やコミュニケーション能力を育てたいと思う。様々な自画像や肖像画の鑑賞を通して、人物の表情や雰囲気の違いだけでなく、色がもたらす感情や筆触による印象の違いなど、造形的な視点から描かれた人物の心情や作者の意図、表現の工夫に迫りたい。

アートカードや絵画パズルを使ったりクイズや遊びの要素を取り入れたりすることで、楽しみながら自然に、作品に積極的に関わり主体的に鑑賞しようとする姿勢を育てることができる。色や筆触が明快な作品を比較して見ることによって、表現の特徴や作品のよさ、美しさをより鮮明に味わえる。また、自分だったらどのような色で彩色するか表現活動と関連させることにより、作者の思いや表現意図にも実感的に触れることができると考える。そして、対話型の鑑賞では、感じたことや表したいことなどを言葉で表し相手に伝えることで、自分の思いや考えを明確にすることができる。また、仲間との対話を通して相手の思いを受け入れ、多様なものの見方や感じ方に気付くことで、自分の中の新しい意味や価値を創り出すことができる。美術作品を初めて鑑賞する児童にとっても、鑑賞の楽しみや喜びを仲間と共有できるように、興味を引きやすい作品や誰もが聞いたことのある画家の作品を対象に、本題材を設定した。

(3) 題材の目標

- 作品のよさや美しさ、表現の多様性に気付き、鑑賞の楽しさを味わう。
- 形や色、筆触など造形的な視点から作者の心情や表現の工夫・意図を感じ取る。
- 感じたことや考えたことを話し合い、作品の見方や感じ方を広げる。

(4) 題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
○造形要素を意識して鑑賞したり、人物の心情や人柄を想像したりして、見ることを楽しもうとしている。	○作品のよさや美しさ、表現の多様性に気付くことができる。
○感じたことや想像したことを言葉で伝えようとしている。	○形や色、筆触などの造形要素に着目して、作者の心情や表現の工夫・意図を感じ取ることができる。
	○感じたことや考えたことを言葉で表現することができる。

(5) 授業展開

(第1次) ひげのある男たち? ～自画像の鑑賞～ 1時間

(第2次) あれもピカソ! これもピカソ! ～自画像・肖像画の鑑賞～ 1時間

(6) 第1次の指導 (ひげのある男たち? ～自画像の鑑賞～)

①目標

- 自画像の鑑賞を通して個性や表現の多様性に気付き、鑑賞の楽しさを味わう。
- 表情や色調から作者の心情を想像するとともに、色や筆触などの造形要素に着目し、作品のよさや美しさを感じ取る。
- 感じたことや考えたことを話し合い、多様なものの見方や感じ方に気付く。

②展開

学 習 活 動	指導上の留意事項	具体的評価規準B [A]
1 本時の目標と学習内容を確認する。	○楽しく美術作品を見ること、造形要素を意識して見ることを伝える。	
■楽しみながら美術作品を見る。色や筆触に着目して見る。 ■感じたことや考えたことを自由に伝え合い、作品を見る視点や多様な感じ方などに気づく。		
2 ゴッホの2枚の自画像を比較して、気づいたことや感じたことを話し合う。 ◇印象はどんな感じ? ◇作者はどんな気持ち? ◇どこが違う? (表情・色・筆あと)	○作品から受ける感想や気づきを自由に発表させる。 ○なぜそう思ったか根拠となる理由を引き出し、感じ方の共通点や違いに気づかせる。 ○肌の色や背景の色、作品全体の色調、筆触などと作品から受ける印象との関係を考えさせる。	○色や筆触[の特徴]に着目して[意欲的に]作品を見ている。(態度) ○表情や色、筆触から[の特徴を捉えて]作者の心情を想像したり、作品のよさや美しさを感じ取ったりすることができる。(発表)
■目元や口元などの表情や作品全体の色調から作者の心情を想像する。 ■どのような色や筆あとで描かれているか、色や筆触に着目して表現の特徴をとらえる。 ■色や筆触がどのような効果をもたらしているか考え、作品のよさや美しさを感じ取る。		
3 複数の自画像のアートカードから同じ作者の作品をマッチングし、印象に残った作品について、選んだ理由や作品の感想を話し合う。 ◇同一人物はどれ? ◇選んだ理由や感想は? ◇私のお気に入りとは?	○ホワイトボードを使って、全員が対話に参加できるようにする。 ○造形要素に着目し、様々な視点から見たり考えたりさせる。 ○表情や作品全体の色調、筆触などが醸し出す雰囲気も感じ取らせる。	○根拠となる理由を[明確に]もって、感想や意見を伝えることができる。 (ホワイトボード) ○[積極的に]自分の意見を伝えたり,[しっかり]友だちの意見を聞いたりしている。(態度)
■個性や表現の多様性に気付き、よさや美しさを感じ取る。 ■なぜそう思ったか、理由や根拠をもって感じたことや考えたことを話し合う。		
4 自画像の作者名と代表的な作品を知り、学習のまとめをする。 ◇作者の作品はどれ?	○表現の特徴を捉えさせる。 ○ワークシートに自己評価と感想をまとめさせる。	○作者の個性や作品のよさ、美しさを感じ取ることができる。(ワークシート)
■代表的な作品を知り、よさや美しさを味わう。		

アートカードゲーム（マッチング）



ホワイトボードまとめ



タブレット対話



(7) 第2次の指導 (あれもピカソ! これもピカソ! ～自画像・肖像画の鑑賞～)

①目標

- ピカソの独創的な表現様式に関心を持ち、色や形のおもしろさを味わう。
- 形や表情から人物像を想像し、イメージした色で彩色しピカソの表現意図に迫る。
- 新しい表現を追い続けたピカソの画家としての生き方を感じ取る。
- 感じたことや考えたことを話し合い、作品の見方や感じ方を広げる。

②展開

学 習 活 動	指導上の留意事項	具体的評価規準B[A]
1 本時の目標と学習内容を確認する。	○色や形に着目して作品を鑑賞することを伝える。	
■色や形に着目して作品を見る。■感じたことやイメージしたことを色で表現する。		
2 ピカソの様々な表現様式の自画像を年代順に並べ、考えたことや感じたことを話し合う。 ◇どんな描き方? ◇どんな色、どんな形?	○表現方法が大きく異なり、緻密で写実的な表現から単純で幼稚な表現に変容していることに気づかせる。 ○ピカソの写真や時代毎の生活の様子を紹介する。	○ピカソの表現に興味をもって鑑賞し、[意欲的に]作品を見ている。(態度) ○色[や形]から作者の心情を想像することができる。(発表)
■写実的な作品からキュビズムの作品まで、ピカソの独創的な表現から豊かな創造力と、色や形のおもしろさを味わう。 ■ピカソの心情と作品の印象を結びつけ、色がもたらす効果や感情について考える。		
3 モノクロの2枚の肖像画を、比較して、気づいたことや感じたことを話し合う。 ◇どちらを向いている? ◇どんな線や形? ◇どんな気持ち・性格?	○キュビズムの描き方を説明し、表現のおもしろさに気づかせる。 ○相違点を見つけることによって、線や形の特徴に気づかせる。 ○線や形などと作品から受ける印象との関係を考えさせる。	○表情や服装、形[の特徴]を捉えながら、人物像を想像することができる。
■キュビズムがどのようにして描かれたか理解し、表現のおもしろさを味わう。 ■表情や服装のデザインや形から、描かれた人物の心情や人柄を想像する。 ■線や形がどのような効果をもたらすかを考え、作者の表現意図を探る。 ■感じたことや想像したことを話し合い、作品の見方や感じ方を広げる。		
4 色鉛筆で彩色する。	○モデルとなった2人の女性の写真から想像を膨らませ、色をイメージさせる。	○人物のイメージを膨らませ、イメージの[に合った]色で彩色することができる。
■自分がイメージした色で彩色し、ピカソの表現意図に迫る。		
5 彩色した絵を鑑賞し合い、配色の意図や感想を伝え合う。	○配色のポイントを伝え合い、互いの作品のよさを認め合えるように言葉かけをする。	○自分の[明確な]表現意図を伝えたり、友だちの意見を[しっかり]聞いたりをしている。

- どんなイメージで彩色したか、自分の思いや表現意図を伝え合う。
- 色のもたらす効果やイメージを意識しながら、友だちの作品を味わう。

6 ピカソの作品や表現について、思ったことをまとめる。

■人間を愛し、新しい表現を追い続けたピカソの生き方に迫る。

○感想や意見を[美術用語を用いて]まとめることができる。(ワークシート)

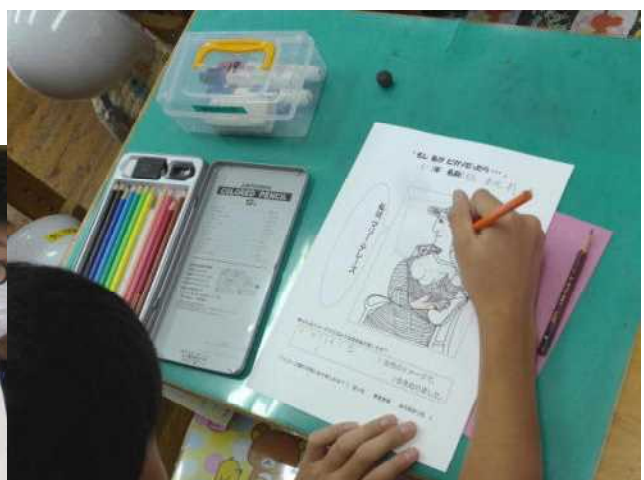
アートカードゲーム（並べ替え）



↑（※この画面は正解ではありません）



イメージ彩色・作品発表と意見交換





私は、ドラ・マール
おしゃれが好きよ。

★どんなイメージでどのような色をぬりましたか？

(かっこいい) 女性のイメージで、
(黒のような) 色をぬりました。

☆イメージ通りの色になりましたか？ (なった) まあまあ ならなかった)



私は、マリ・テレーズ
やわらかい色が好きなの。

★どんなイメージでどのような色をぬりましたか？

(優しくおのあな) 女性のイメージで、
(やわらかい) 色をぬりました。

☆イメージ通りの色になりましたか？ (なった) まあまあ ならなかった)



私は、ドラ・マール
おしゃれ好きよ

★どんなイメージでどのような色をぬりましたか？

(大人を感じてしっかり) 女性のイメージで、
(こい) 色をぬりました。

☆イメージ通りの色になりましたか？ (なった) まあまあ ならなかった)



私は、マリ・テレーズ
すずしい色が好きな人よ。

★どんなイメージでどのような色をぬりましたか？

(優しくな) 女性のイメージで、
(すずしいがんだ) 色をぬりました。

☆イメージ通りの色になりましたか？ (なった) まあまあ ならなかった)



私は、ドラ・マール
カ、コイでしょ。

★どんなイメージでどのような色をぬりましたか？

(しっかりしていてカ、コイ) 女性のイメージで、
(こい 感じの色で) 色をぬりました。

☆イメージ通りの色になりましたか？ (なった) まあまあ ならなかった)



私は、マリ・テレーズ
世界一美しいマリ・様よ。

★どんなイメージでどのような色をぬりましたか？

(はだが白くて、とてもきれいな) 女性のイメージで、
(むらさきを中心に暗い) 色をぬりました。

☆イメージ通りの色になりましたか？ (なった) まあまあ ならなかった)

(8) 授業後の児童の感想

○興味関心の向上について	○作品を見ると、描いている人のそれぞれのよさがあっていいなと思った。もっと、違う作品を見てみたいという気持ちにもなった。 ○ピカソの作品は独特なものばかりだと思っていたけれど、若い頃に写真のような絵を描いていてびっくりした。ピカソについてもっと知りたいという興味をもてた。 ○きれいな作品やおもしろい作品があるので、絵を見ていると楽しい気分になった。 ○想像を超えた独特の絵があって驚いた。美術館に行きいろいろな絵を見てみたい。
○教材や指導の工夫について	○自画像の年齢を当てたり自画像を年齢順に並べたり、ゲームみたいなのがあって楽しかった。 ○カードを使ってどれが誰の作品かを考えるの学習がおもしろかった。グループの友だちと話し合えてよかった。 ○色ぬりが楽しかった。でも、色で気持ちを考えるのは難しかった。
○造形要素やイメージについて	○描く人によって描き方や色づかい、また、感じ方も違った。ゴッホの絵はいろいろな曲線で描かれていて、青色をよく使っていた。ルノワールの絵は優しくて落ち着いた感じの絵だった。いろいろな画家の特徴を調べてみたい。 ○同じ人が自画像を描いても、色の使い方や表情や背景のぬり方でイメージや雰囲気が違って見えるんだなと思った。ぼかしてぬるとちょっと優しく見えた。 ○すごく細かく描けていてすごいと思った。色づかいによって、悲しい絵とか怒っている絵とかがよく分かった。
○作者の心情や表現意図について	○同じ人が自分の自画像を描いていたけれど、イメージが全然違っていてびっくりした。自画像には、その人のその時の出来事や思いなどが表されていることが分かった。絵にいろいろな思いや感情があってとてもおもしろかった。 ○ピカソは相手の性格や気持ち、自分の気持ちを色や線の描き方で表現していて、とても面白く不思議な絵だった。たくさん色を使い、感じたことを描いていた。 ○ピカソは自分の思った感情を色で自由自在に表現できるんだなあと思った。 ○ピカソがなぜあんな絵を描いたのかを考えるのは楽しかった。
○意見交流について	○ホワイトボードでみんなどんな考えかがわかった。友だちがこんなことを考えていたのだと感心した。 ○友だちの意見が聞けて、人それぞれ考え方が違うんだとわかった。 ○みんな感じ方が違ってこれからの自分の勉強に生かせると思った。
○表現への意欲について	○陰などの細かい部分をきれいにぬっているんだなと思った。色の使い方や筆あとがきれいだったので、絵を描くときは筆あとに気をつけたい。 ○絵は見た色をそのまま写して描くのもいいけれど、自分が感じたことを表現しても全然不思議じゃないことが分かった。自由な絵を描くとすれば、ピカソのように感じたことを色で表現してみたい。

5 研究の成果（仮説の検証）

【仮説①について】

プレゼンテーションソフトで作成した提示資料や題材のねらいに合わせて作ったアートカードなど、教材の開発を図ることで子どもたちは「見ること」を楽しみながら作品の見方を学ぶことができた。特に、課題によってカードを選んだり並べ替えたりする活動は「作品を見る」ことへの意欲喚起や「作品をよく見る」ための契機となり、グループで互いに意見を交わしながら生き生きと学習できていた。また、提示資料で多様な表現のよさを味わうとともに、肌の色や背景の色、作品全体の色調や筆触など、鑑賞ポイントを焦点化させて取り上げることにより、造形的な視点に着目して作品を見ることができた。見比べることにより共通点や相違点を発見し、自然と作品をよく見ることができた比較鑑賞は、小学生の「見る視点」を広げ「見る力」を育てるのに有効であったと思う。以上のことから、教材の開発や遊びの要素を取り入れた学習など指導方法の工夫を図ることで、造形要素について理解するとともに、「見ること」に興味関心をもち、積極的に作品に関わり主体的に鑑賞しようとする態度を育てることができたと言える。

【仮説②について】

自分だったらどのような色をおくか、人物の写真や下絵から受けた印象を基に自分の中でのイメージを膨らませ、実際にミニ作品に彩色することで、作者という立場に立ってイメージや色について構想することができたと思う。今回は45分の中に組み込んだ表現活動で時間に余裕がなかったため、自分の配色経験をふまえて改めて作者の配色と表現意図を読み取る振り返りの時間がとれなかったが、作者のモデルに対する思いや表現の工夫に触れることはできたのではないかと思う。色の濃淡や色あいそのものがもたらす効果と表したいイメージの関係などについても理解できたことが、児童の作品や学習プリントの記述内容からも確認できる。よって、表現活動との関連を図り、自分の経験や表現活動と結び付けることで、イメージや想像力を膨らませて作者の心情や表現意図を共感的に感じ取ることができたと言える。

【仮説③について】

作品から受けた印象や感じたことを言葉で表し相手に伝えること、ただ「なんとなく」ではなく「なぜそう思ったか」その理由や根拠となるものを考えること、「どんなイメージで彩色したか」自分の表現意図を伝えること、それらの活動を繰り返し行うことで言語活動の充実を図り、少しずつ自分の思いや考えをまとめながら明確にすることができた。ホワイトボードの活用は、色や言語化した自分の思いを視覚的に確認したり他者に伝えたりできるという点で効果的であったと思う。また、大小様々なグループでの対話により、仲間とのコミュニケーションを深めながら、自分とは違ったものの見方や感じ方に気付くことができたと思う。今回は小規模校を含む3校の合同学習であったため、タブレット画面を通して、学校を超えたグループでの作品紹介や意見交換を行った。普段では難しい、より多くのいろいろな意見を聞いて見方や考え方を広げるということにおいては、ICTを活用した合同学習の意味が十分に発揮されたと言ってよい。全ての児童が自分としての新しい意味や価値を創り出すところまでは至っていないかもしれないが、自分の感じたことやイメージを言葉で表す言語活動や、自分の思いを伝えたり仲間の思いを受け入れたりする対話的な学習の充実を図ることで、自分の考えを明確にするとともに多様なものの見方や感じ方に気付き、自分なりに自身の感覚や価値を見出すことができると言える。

6 今後の課題

今回の研究を通して、「見ること」は子どもたちの美術に対する興味関心や理解を深め、自分にとって価値のある作品との出会いは豊かな感性を育むための大切な糧となることを再認識した。しかし、小学校で出前授業をさせていただくことで、更なる課題も見えてきた。

一つ目は、小中の系統性を踏まえた指導計画が重要であること。各学年でどのような作品を用意するのか、どのような方法で鑑賞活動を行うのか、どこに鑑賞を位置づけるのかなど、それぞれの発達段階に応じた題材の工夫やねらいに応じた鑑賞スタイルや指導方法を考え、指導に生かすことが大切であり、ここでも小中の連携は必要不可欠となってくる。現在、少しずつではあるが、多くの地域や学校で小中一貫教育、或いは連携教育の取組が着実に増えてきている。互いの授業や子どもたちについて情報を交換するだけでも得ることは多い。小学校から中学校への学習内容の引き継ぎだけでもできないものだろうか。鑑賞教育の充実のためにも、まず図画工作科・美術科の教員が互いの顔を知り、気軽に話せる関係を築くことが大切であると思う。

二つ目は、評価について、より信頼性や客観性のある評価方法に工夫改善していく必要があること。アンケート結果からも分かるように多くの教員が評価についての悩みを抱えている。教員にとっても子どもたちにとっても、学習のふりかえりは必要である。評価資料としては、ワークシートや感想文、作品の相互評価など子どもたち自らが記入した学習過程の資料を情報源とするのが一般的で、中学校では定期テストで使用している鑑賞シート（ペーパーテスト）も評価資料として多く使われているが、題材ごとにねらいとする資質や能力が確かに身に付いたかどうかをこまめに評価することが大切であると考えている。

6 おわりに

全ての学習において「よく見ること」「よく聞くこと」は学びの基本であり、またそれは「よく生きる」ことにも繋がっていくと考える。漠然と見たものは深く残らない。意識して見て、聞いて、初めて自分のものとなる。自分が興味をもっていることは鮮明に覚えているものだ。

鑑賞指導についても同じように捉えている。堅苦しく考えず、まず教員自身が多様な作品を見て、自分の好きな作品や興味のある作品を見つければよい。いろいろな鑑賞の授業を見て指導方法を知り、目の前の子どもたちに合った鑑賞スタイルを選べばよい。教員が本当にすばらしいと感じた作品は、その感動が子どもたちにも伝わるはずである。

作品のよさや美しさ、鑑賞の楽しみをもっともっと子どもたちに伝えたい。また、小学校の早い段階から伝えてほしいと願う。学習のねらいに応じたプレゼンや資料教材、評価シートの提供など、美術科教員が小中の橋渡役となれるよう、今後も鑑賞教育の定着と活性化を目指し、子どもたちの心に響き豊かな感性を育む鑑賞教育について探っていきたいと思う。

本研究にあたり、出前授業やアンケートに協力いただいた三好郡市の先生方に厚くお礼申し上げ、本研究のまとめとしたい。

7 参考文献等

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（文部科学省）

www.mext.go.jp/component/b.../09/.../1377021_1_5.pdf

小中一貫教育の成果と課題について，中央教育審議会の答申より抜粋

www.city.sanyo-onoda.lg.jp/uploaded/.../37626_61346_misc....

これからの鑑賞教育のあり方—全国的な調査や研修講座から探る—島崎裕

www.nps.ed.jp/nara-c/gakushi/kiyou/h17/data/a/a10.pdf

児童生徒の図画工作・美術への興味・関心・意欲を高める手立てを探る

—図画工作と美術の作品の相互鑑賞を通して—糸満市立中学校 島筒格

www.nanbukouiki-okinawa.jp/.../37-234-simazututadasi.pdf

図画工作科，美術科における一貫教育のすすめ（日文教育資料）

www.nichibun-g.co.jp/library/e.../e-other12_mp03.pdf

小・中連携から見直す図画工作・美術の授業（開隆堂出版）

www.kairyudo.co.jp/.../h21-23_primary-junior_art_ren...

芸術を学ぶことで変わる私たちの暮らし 京都造形芸術大学芸術学部通信教育部 松生歩

www.kyoto-art.ac.jp/t/column/2011/10/225/ -

自分との関わりを大切にした美術の表現や鑑賞（教育課程ライブラリ） 永関和雄

造形教育実践全集 日本教育図書センター

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年 度 (平成)	内 容
30	元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして ー学校・家庭・地域が一体となってー 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」 ーふるさと意識を高めるためにー 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成 ーボランティア活動を通してー 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 ー同単元類似内容の指導の試みー 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ ー児童・生徒の理解と援助のためにー 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	2	ふるさとの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道德教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画 ー平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試みー 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して ーコミュニケーション能力の育成のためにー 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	3	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー人とのかかわりをとおしてー 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動 ーたて割り班の活動を通してー 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 ー進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指してー 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか ー学校行事などの活動を通してー 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動 ー学習意欲を高める理科の指導ー 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 ー個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通してー 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究 ー性教育の実践を通してー 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して ー体験的活動を通してー 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導 ー行書を活用した筆写活動の日常化をめざしてー 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子

集	年 度 (平成)	内 容
34	5	健康でたくましい子どもの育成をめざして ー主体的に取り組む活動ー 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 ー一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習ー 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成 ーボランティア活動をととしてー 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代 奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめるー私案 ーピース・メッセージの実践を通してー 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	6	地域に開かれた学校づくり ーすこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事ー 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み ー教科、特別活動の実践を通してー 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 ー家庭科ー 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	7	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考えるー 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして ー「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組みー 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 ー体験学習・ボランティア活動を通してー 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして ー自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援ー 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指してー中学1年生への意識調査と実践例ー 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 ー施設訪問を通してー 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 ー「何について」「どのように」「どこまで」指導するかー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代

集	年 度 (平成)	内 容
38	9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境をどのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切にし、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して ー積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成ー 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適応問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 ーある不登校児とのかかわりを通してー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために ー地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成ー 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は？ ー三好郡内小中学生意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	11	魅力ある幼稚園教育の創造（三好町三園の取り組み） ー生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成ー 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 ー名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通してー 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 ー「選択の時間」を生かした取り組みの中でー 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子
41	12	「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ 自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 ー地域の特性を生かした取り組みの中でー 池田第一中学校 教諭 立花 久 三好郡における情報教育の現状とその考察 ー郡内小中学生・教職員の意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子

集	年 度 (平成)	内 容
42	13	「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 ー幼児が自ら生活していくための教師の役割ー 白地幼稚園 教諭 木徳 友子 「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 ーへき地の特性を生かした様々な体験活動をとおしてー 東山小学校 教諭 高篠 佳子 生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道 T T授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料 (平成12年度・13年度)から中学校数学におけるT T授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵
43	14	豊かな感性をはぐくむ教育の創造 ー金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美 数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 ー学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワークー 三好郡ネットワークセンター I C T コーディネータ 中川 斉史 生藤 元
44	15	生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 ー身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかわればよいかー 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子 「生きる力」を育む総合的な学習 ーふるさとを愛し、人や自然と積極的にかわろうとする児童の育成をめざしてー 出合小学校 教諭 岡 佳子 「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史 「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について ー人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるためにー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 生きる力をはぐくむ教育の探求 ー「本との出会い」をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美
45	16	ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校 「みる力」を育てる美術教育 ー美術の基礎・基本をみつめてー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元

集	年 度 (平成)	内 容
46	17	幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、 幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元 文字式の指導に関する研究 ー1年文字式における生徒の理解の仕方についてー 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 ー主体的により良く伝え合う力の育成をめざしてー 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 ー共に生きる町づくりについて考えようー 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	19	「健全な心身の成長をめざして」ー高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながらー 第2ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 自らの食生活に関心を持ち、すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 ー学校・家庭・地域の連携した取り組みー 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために ープレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用ー 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」ー何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析をー 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 ー子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えようー 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 ー評価活動におけるマークシートの利用ー 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 檮生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 ー『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心としてー 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 ー構成的グループエンカウンターを考え方を生かしてー 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹

集	年 度 (平成)	内 容
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして 一人やものとかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－ 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－ 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 一人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－ 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－ 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－ 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして－ 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり －小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－ 東祖谷小学校 教諭 森永 直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 －ＥＳＤ（持続発展教育）の視点を取り入れて－ 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 －学級担任アンケート調査と研究授業より－ 昼間小学校 教諭 山口 恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所 研究員 岡本 博一

集	年 度 (平成)	内 容
54	25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ～様々な体験活動を通じて、 地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究～ 昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 地域とともにある学校をめざして ～地域の教育力を生かして育てる三庄っ子～ 三庄小学校 教諭 三好美智代 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 三好中学校 教諭 近藤 剛 複式学級における指導の充実を目指して 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 I C T活用の推進と情報モラル教育 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して 家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践～ 井内小学校 教頭 住田 克弘 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ～学校図書館を中心として～ 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 小中連携教育～東祖谷小中学校の取り組み 三好教育研究所 研究員 岡本 博一 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ～討論活動を取り入れた授業づくり 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
56	27	自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ～地域との交流を通してふるさとの魅力再発見～ 箸蔵小学校 教諭 藤原 隆司 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて ～識字学級との交流を通して～ 三野中学校 教諭 尾形 君代 「読む 知る 感じる」 読書環境をめざして ～学校図書館教育の実践と課題～ 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ～ネット端末（スマホ等）の使用時間を見直して～ 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹

集	年 度 (平成)	内 容
57	28	地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成 ～様々な人とのかかわりや体験活動を通して～ 山城小学校 （ 発表者 教諭 井上清隆 ） 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育 ～見て、考えて、表して、意見を交わす～ 三好教育研究所 研究員 宮成 万寿美